

変身

DIE VERWANDLUNG

フランツ・カフカ
FRANZ

原田義人訳



ある朝、グレゴール・ザムザが気がかりな夢から目ざめたとき、自分がベッドの上で一匹の巨大な毒虫に変つてしまつてゐるのに気づいた。彼は甲殻のように固い背中を下にして横たわり、頭を少し上げると、何本もの弓形のすじにわかれてこんもりと盛り上がつてゐる自分の茶色の腹が見えた。腹の盛り上がりの上には、かけぶとんがすつかりずり落ちそうになつて、まだやつともちこたえていた。ふだんの大きさに比べると情けないくらいかぼそいたくさんの足が自分の眼の前にしょんぼりと光つていた。

「おれはどうしたのだらう？」と、彼は思った。夢ではなかつ

た。自分の部屋、少し小さすぎるがまともな部屋が、よく知つて
 いる四つの壁のあいだにあつた。テーブルの上には布地の見本
 が包みをといて拵げられていたが——ザムザは旅廻りのセール
 スマンだつた——、そのテーブルの上方の壁には写真がかかっ
 ている。それは彼がついさきごろあるグラフ雑誌から切り取り、
 きれいな金ぶちの額に入れたものだつた。写つているのは一人
 の婦人で、毛皮の帽子と毛皮のえり巻とをつけ、身体をきちん
 と起こし、肘ひじまですつぽり隠れてしまふ重そうな毛皮のマフを、
 見る者のほうに向つてかかげていた。

グレゴールの視線はつぎに窓へ向けられた。陰鬱いんうつな天気は
 ——雨だれが窓わくのブリキを打っている音が聞こえた——彼
 をすつかり憂鬱にした。「もう少し眠りつづけて、ばかばかしい
 ことはみんな忘れてしまつたら、どうだろう」と、考えたが、全

然そうはいかなかつた。というのは、彼は右下で眠る習慣だったが、この今の状態ではそういう姿勢を取ることはできない。いくら力をこめて右下になろうとしても、いつでも仰向けあおむの姿勢にもどつてしまうのだ。百回もそれを試み、両眼を閉じて自分のもぞもぞ動いているたくさんの脚を見ないでもすむようにしていたが、わき腹にこれまでまだ感じたことのないような軽い鈍痛を感じ始めたときに、やっとそんなことをやるのはやめた。

「ああ、なんという骨の折れる職業をおれは選んでしまったんだろう」と、彼は思った。「毎日、毎日、旅に出ているのだ。自分の土地での本来の商売におけるよりも、商売上の神経の疲れはずっと大きいし、その上、旅の苦労というものがかかっている。汽車の乗換え連絡、不規則で粗末な食事、たえず相手が變つて

長つづきせず、けつして心からうちとけ合うようなことのない人づき合い。まったくいまましいことだ！」彼は腹の上に軽いかゆみを感じ、頭をもつとよくもたげることができるよう、仰向けのまま身体をゆつくりとベッドの柱のほうへずらせ、身体のかゆい場所を見つけた。その場所は小さな白い斑点だけに被^{おお}われていて、その斑点が何であるのか判断を下すことはできなかつた。そこで、一本の脚でその場所にさわろうとしたが、すぐに脚を引っこめた。さわつたら、身体に寒気がしたのだ。

彼はまた以前の姿勢にもどつた。「この早起きというのは」と、彼は思った、「人間をまったく薄ばかにしてしまふのだ。人間は眠りをもたなければならぬ。ほかのセールスマンたちはまるでハレムの女たちのような生活をしている。たとえばおれがまだ午前中に宿へもどつてきて、取つてきた注文を書きとめよ

うとすると、やつとあの連中は朝食のテーブルについているところだ。そんなことをやったらおれの店主がなんていうか、見たいものだ。おれはすぐさまくびになってしまふだろう。ところで、そんなことをやるのがおれにとってあんまりいいことではないかどうか、だれにだってわかりはしない。両親のためにそんなことをひかえているのでなければ、もうとつくに辞職してしまっているだろう。店主の前に歩み出て、思うことを腹の底からぶちまけてやったことだろう。そうしたら店主は驚いて机から落つこちてしまふにちがいなかつたのだ！ 机の上に腰かけて、高いところから店員と話をするというのも、奇妙なやりかただ。おまけに店員のほうは、店主の耳が遠いときいているので近くによつていかなければならないのだ。まあ、希望はまだすつかり捨てられてしまつたわけではない。両親の借金をすつ

かり店主に払うだけの金を集めたら——まだ五、六年はかかるだろうが——きつとそれをやってみせる。とはいっても、今のところはまず起きなければならぬ。おれの汽車は五時に出るのだ」

そして、たんすの上でカチカチ鳴っている目ざまし時計のほうに眼をやった。「しまった！」と、彼は思った。もう六時半で、針は落ちつき払って進んでいく。半もすぎて、もう四十五分に近づいている。目ざましが鳴らなかつたのだろうか。ベッドから見ても、きちんと四時に合わせてあつたことがわかつた。きつと鳴つたのだ。だが、あの部屋の家具をゆさぶるようなベルの音を安らかに聞きのがして眠っていたなんていうことがありうるだろうか。いや、けつして安らかに眠っていたわけではないが、おそらくそれだけにいつそうぐつすり眠っていたのだ。

だが、今はどうしたらいいのだろう。つぎの汽車は七時に出る。その汽車に間に合うためには、気ちがいのように急がなければならぬだろう。そして、商品見本はまだ包装してないし、彼自身がそれほど気分がすぐれないし、活澁な感じもしないのだ。そして、たとい汽車に間に合ったとしてさえ、店主の雷は避けることができないのだ。というのは、店の小使は五時の汽車に彼が乗るものと思つて待つていて、彼が遅れたことをとつくに報告してしまつてゐるはずだ。あの男は店主の手先で、背骨もなければ分別もない。ところで、病気だといつて届け出たらどうだろうか。だが、そんなことをしたら、ひどく面倒になるし、疑いもかかるだろう。なにしろ、グレゴールは五年間の勤めのあいだにまだ一度だつて病気になつたことがないのだ。きつと店主は健康保険医をつれてやつてきて、両親に向つてなまけ者

の息子のことを非難し、どんなに異論を申し立てても、保険医を引合いに出してそれをさえぎってしまうことだろう。その医師にとつては、およそまったく健康なくせに仕事の嫌いな人間たちというものしかないのだ。それに、今の場合、医者のお考えもそれほどまちがっているだろうか。事実、グレゴールは、長く眠つたのにほんとうに眠気が残っていることを別にすれば、まったく身体の調子がいい気がするし、とくに強い空腹さえ感じているのだつた。

ベッドを離れる決心をすることができないままに、そうしたすべてのことをひどく急いで考えていると——ちょうど目ざまし時計が六時四十分を打つた——、彼のベッドの頭のほうにあるドアをノックする音がした。

「グレゴール」と、その声は叫んだ——母親だつた——「六時

四十五分よ。出かけるつもりじゃないのかい？」

ああ、あのやさしい声！ グレゴールは返事をする自分の声を聞いたとき、ぎくりとした。それはたしかにまぎれもなく彼の以前の声であつたが、そのなかに下のほうから、抑えることのできない苦しそうなびいびいいう音がまじつていた。その音は、明らかにただ最初の瞬間においてだけは言葉の明瞭さを保たせておくのだが、その余韻よゐんをすっかり破壊してしまつて、正しく聞き取つたかどうかわからないようにするほどだつた。グレゴールはくわしく返事して、すべてを説明しようと思つていたのだつたが、こうした事情では、「ええ、わかりましたよ、ありがとうございます、お母さん、もう起きますよ」と、いうにとどめた。木のドアが距てているため、グレゴールの声の変化は外ではきつと気づかれなかつたのだらう。というのは、母親はこの説明で

満足して、足をひきずって立ち去った。ところが、このちよつとした対話によつて、グレゴールが期待に反してまだ家にいるのだ、ということが家族のほかの者たちの注意をひいてしまった。そして、早くも父親がわきのドアを、軽くではあるが拳こぶしでノックした。

「グレゴール、グレゴール」と、父は叫んだ。「いったい、どうしたのだ？」そして、ちよつとたつてから、もつと低い声でもう一度注意するのだった。「グレゴール！ グレゴール！」

もう一つのわきのドアでは、妹が低い声で嘆くようにいった。「グレゴール、どうしたの？ かげんが悪いの？ 何か欲しいものはないの？」

グレゴールは両方に向つていった。

「もうすんだよ」

そして、発音に大いに気を使い、一つ一つの言葉のあいだに長い間まをはさむことによつていつさいの目立つ点を取り除こうと努めた。父親はそれを聞いて朝食へもどつていったが、妹はささやくのだった。

「グレゴール、開けてちょうだいな。ね、お願い」

だが、グレゴールはドアを開けることなど考えてもみず、旅に出る習慣から身につけるようになった家でもすべてのドアに夜のあいだ鍵かぎをかけておくという用心をよかつたと思つた。

はじめは、落ちつき払つて、だれにもじやまされずに起き上がり、服を着て、まず何よりさききに朝食を取ろう、それから、はじめでそれからのことを考えようと思つたのだつた。というのは、ベッドのなかにいたのでは、あれこれ考えたところで理にかなつた結論に到達することはあるまい、とはつきりと気づい

たのだった。これまでしよつちゆうベッドのなかで、おそらくはまずい寝かたをしたためだろうが、そのために起つた軽い痛みを感じた、ということをや彼は思い出した。その痛みは、やがて起き上がってみるとまったくの空想だとわかつたのだった。そして、自分のきよのさまじまな考えごともしだんだん消え去ることだろう、と大いに期待した。声の変化は旅廻りのセールスマンの職業病であるひどい風邪の前ぶれにすぎないのだ、ということをや彼は少しも疑わなかつた。

かけぶとんをはねのけるのは、まったく簡単だつた。ただちよつと腹をふくらませるだけで、ふとんは自然とずり落ちた。だが、そのあとが面倒なことになつた。その理由はことに彼の身体の幅がひどく広がつたからだ。身体を起こすためには、手足を使うはずだつた。ところが、人間の手足のかわりにたくさ

んの小さな脚がついていて、それがたえずひどくちがった動きかたをして、おまけにそれらを思うように動かすことができない。やつと一本の脚を曲げようとする、最初に起こることは、自分の身体がのびてしまうことだった。やつとその脚で自分の思うようにすることに成功したかと思うと、そのあいだにほかのすべての脚がまるで解放されたかのように、なんとも工合の悪い大きわぎをやるのだった。

「ともかくベッドのなかに意味もなくとどまっていけないことだと、グレゴールは自分に言い聞かせた。

まず彼は身体の下部分を動かしてベッドから出ようとしたが、まだ自分で見てもいないし、正しい想像をめぐらすこともできないでいるこの下半身の部分は、ひどく動かすことがむずかしいとわかった。動作はのろのろ進むだけだった。とうとう、

まるで半狂乱になつて、力をこめ、むちやくちやに身体を前へ突き出したが、方角を誤つてしまい、足のほうのベッド柱にはげしくぶつかり、そのとき感じた痛みで、まさに自分の身体の下部分が今のところいちばん敏感な部分なのだ、ということがわかつた。

そこで、まず最初に上体をベッドの外に出そうと試み、用心深く頭をベッドのへりのほうに向けた。これは思ったとおりのまくいき、身体の幅が広く、体重も重いにもかかわらず、ついに身体全体が頭の転回にのろのろとついて廻つた。だが、頭をとうとうベッドの外の宙に浮かべてみると、このやりかたでさらに前へ乗り出していくことが不安になつた。というのは、こゝうやつて最後に身体を下へ落してしまふと、頭を傷つけまいとするならば奇蹟でも起こらなければできないものではない。そし

て、とくに今はどんなことがあつても正気を失うわけにはいかないのだ。そこで、むしろベッドにとどまつていようと心にきめた。

だが、また同じように骨を折つて、溜息をもらしながら、さっきのように身体を横たえ、またもや自分のたくさんの小さな脚がおそらくさつきよりもいつそうひどく争い合っているのをながめ、この勝手な争いに静けさと秩序とをもちこむことが不可能だとわかつたときに、もうベッドのなかにとどまつていることはできない、たといベッドから出られるという希望がほんのちよつとしかないにしても、いつさいを犠牲にして出ようと試みるのがいちばん賢明なやりかたなのだ、とまた自分に言い聞かせた、だが同時に、やけになつて決心するよりも冷静に、きわめて冷静に思いめぐらすほうがずっといいのだ、とときどき

思い出すことを忘れなかつた。そんなことを考えている瞬間に、眼をできるだけ鋭く窓のほうへ向けたが、狭い通りのむこう側さえ見えなくしている朝もやをながめていても、残念ながらほとんど確信も元気も取りもどすわけにはいかなかつた。

「もう七時だ」と、目ざましが新たに打つのを聞いて、彼は自分言い聞かせた。「もう七時だというのに、まだこんな霧だ」そして、完全に静かにしていればおそらくほんとうのあたりまえの状態がもどつてくるのではないかといわんばかりに、しばらくのあいだ、静かに、微かな息づかいをしながら、横たわっていた。

だが、やがて自分に言い聞かせた。「七時十五分を打つ前に、おれはどうあつてもベッドを完全に離れてしまつていなければならぬぞ。それにまた、それまでには店からおれのことをき

きにだれかがやってくるだろう。店は七時前に開けられるんだから」そして、今度は、身体全体を完全にむらなく横へゆすつてベッドから出る動作に取りかかった。もしこんなふうにしてベッドから落ちるならば、頭は落ちるときにぐつと起こしておこうと思うから、傷つかないですむ見込みがある。背中^{じゅうたん}は固いようだ。だから、絨毯じゅうたんの上に落ちたときに、背中にけがをすることはきつとないだろう。落ちるときに立てるにちがいない大きな物音のことを考えると、それがいちばん気にかかった。その音は、どのドアのむこうでも、驚きとまではいかないにしても、心配をひき起こすことだろう。だが、思いきつてやらなければならぬのだ。

グレゴールがすでに半分ベッドから乗り出したとき——この新しいやりかたは、骨の折れる仕事というよりもむしろ遊びの

ようなもので、いつまでもただ断続的に身体をゆすつてさえいればよかつた——、自分を助けにやってきてくれる者がいれば万事はどんなに簡単にすむだろう、という考えがふと頭に浮かんだ。力の強い者が二人いれば——彼は父親と女中とのことを考えた——それだけで完全に十分なのだ。その二人がただ腕を彼の円味をおびた背中の下にさし入れ、そうやって彼をベッドからはぎ取るように離し、この荷物をもつたまま身体をこごめ、つぎに彼が床の上で寝返りを打つのを用心深く待っていてくれさえすればよいのだ。床の上でならおそろくこれらのたくさんの脚も存在意義があることになるだろう。ところで、すべてのドアに鍵がかかっていることはまったく別問題としても、ほんとうに助けを求めるべきだろうか。まったく苦境にあるにもかかわらず、彼はこう考えると微笑を抑えることができなかった。

この作業は進行して、もつと強く身体をゆすればもうほとんど身体の均衡が保てないというところにまできていた。もうすぐ最後の決断をしなければならぬ。というのは、あと五分で七時十五分になる。——そのとき、玄関でベルが鳴った。「店からだれかがきたんだ」と、彼は自分に言い聞かせ、ほとんど身体がこわばる思いがした。一方、小さな脚のほうはただそれだけせわしげにばたばたするのだった。一瞬、あたりはしんとしていた。「ドアを開けないのだな」と、グレゴールは何かばかげた期待にとらわれながら思った。だが、むろんすぐいつものように女中がしつかりした足取りでドアへ出ていき、ドアを開けた。グレゴールはただ訪問者の最初の挨拶を聞いただけで、それがだれか、早くもわかった。——それは支配人自身だった。なぜグレゴールだけが、ほんのちよつと遅刻しただけですぐ最大の

疑いをかけるような商會に勤めるように運命づけられたのだろうか。いったい使用人のすべてが一人の除外もなくやくざなのだろうか。たとい朝のたつた一、二時間は仕事のために使わなかつたにせよ、良心の苛責かしやくのために気持ちがいじみた有様になつて、まさにそのためにベッドを離れられないような忠実で誠実な人間が、使用人たちのあいだにはいないのだろうか。小僧にききにこさせるだけでほんとうに十分ではないだろうか——そもそもこうやつて様子をたずねることが必要だとしてのことだが——。支配人が自身でやつてこなければならぬのだろうか。そして、支配人がやつてくることによつて、この疑わしい件の調査はただ支配人の分別にだけしかまかせられないのだ、ということをして罪のない家族全体に見せつけられなくてはならないのか。ほんとうに決心がついたためというよりも、むし

ろこうしたものの思いによつて置かれた興奮のために、グレゴールは力いっぱいベッドから跳とび下りた。どすんと大きな音がしたが、それほどひどい物音ではなかった。絨毯がしいてあるため、墜落の力は少しは弱められたし、背中もグレゴールが考えていたよりは弾力があつた。そこでそう際立つて大きな鈍い物音はしなかつた。ただ、頭は十分用心してしつかりともたげていながつたので打ちつけてしまった。彼は怒りと痛みとのあまり頭を廻して、絨毯にこすつた。

「あの部屋のなかで何か落ちる音がしましたね」と左側の隣室で支配人がいった。グレゴールは、けさ自分に起つたようなことがいつか支配人にも起こらないだろうか、と想像しようとした。そんなことが起こる可能性はみとめないわけにはいかないのだ。だが、まるでグレゴールのこんな問いに乱暴に答えるか

のように、隣室の支配人は今度は一、二歩しつかりした足取りで歩いて、彼のエナメル靴をきゆうきゆう鳴らした。グレゴールに知らせるため、右側の隣室からは妹のささやく声がした。

「グレゴール、支配人がきているのよ」

「わかつているよ」と、グレゴールはつぶやいた。しかし、妹が聞くことができるほどにあえて声を高めようとはしなかった。

「グレゴール」と、今度は父親が左側の隣室からいった。「支配人さんがおいでになつて、お前はなぜ朝の汽車でたたなかつたか、ときいておられる。なんと申し上げたらいいのか、むしろにはわからん。それに、支配人さんはお前とじかに話したいといつておられるよ。だから、ドアを開けてくれ。部屋が取り散らしてあることはお許し下さるさ」

「おはよう、ザムザ君」と、父親の言葉にはさんで支配人は親

しげに叫んだ。

「あの子は身体の工合がよくないんです」と、母親は父親がまだドアのところではしゃべっているあいだに支配人に向つていつた。「あの子は身体の工合がよくないんです。ほんとうなんです、支配人さん。そうでなければどうしてグレゴールが汽車に乗り遅れたりするでしょう！ あの子は仕事のこと以外は頭がないんですもの。夜分にちつとも外へ出かけないことを、わたしはすでに腹を立てているくらいなんです。これで一週間も町にいるのに、あれは毎晩家にこもりきりでした。わたしたちのテーブルに坐つて、静かに新聞を読むとか、汽車の時間表を調べるとかしているんです。糸のこ細工でもやっていけば、あの子にはもう氣ばらしなんですからね。たとえばこのあいだも二晩か三晩かかって小さな額ぶちをつくりました。どんなにうま

くできたか、ごらんになれば驚かれるでしょうよ。あの部屋にかけてあります。グレゴールがドアを開けましたら、すぐごらんになりますよ。ともかく、あなたがおいで下すつて、ほんとはよかつたとわたしは思っております、支配人さん。わたしたちだけではグレゴールにドアを開けさせるわけにはいかなかつたでしょう。あの子はとても頑固者でしてねえ。でも、朝にはなんでもないと申ししておりましたが、あの子はきつと工合が悪いのですよ」

「すぐいきますよ」と、グレゴールはゆつくりと用心深くいつたが、むこうの対話をひとことでも聞きもらすまいとして、身動きをしなかつた。

「奥さん、私にもそれ以外には考えようがありませんね」と、支配人はいった。「たいしたことでないといいいんですが。とはい

え、一面では、われわれ商売人というものは、幸か不幸かはどちらでもいいのですが、少しぐらいかげんが悪いなんていうのは、商売のことを考えるとあつさり切り抜けてしまわなければならぬことがしよつちゅうありましてね」

「では、支配人さんに入っていたいでかまわないね」と、いらいらした父親がたずね、ふたたびドアをノックした。

「いけません」と、グレゴールはいった。左側の隣室では気まぜい沈黙がおとずれた。右側の隣室では妹がしくしく泣き始めた。

なぜ妹はほかの連中のところへいかないのだろう。きつと今やつとベッドから出たばかりで、まだ服を着始めていなかったのだろう。それに、いつたいなぜ泣くのだろう。おれが起きず、支配人を部屋へ入れないからか。おれが地位を失う危険があり、

そうなると店主が古い借金のことをもち出して、またもや両親
 を追求するからだろうか。しかし、そんなことは今のところは
 不必要な心配というものだ。まだグレゴールはここにいて、自
 分の家族を見捨てようなどとは、ほんの少しだつて考えてはい
 ないのだ。今のところ絨毯の上にのうのうと寝ているし、彼の
 状態を知った者ならばだれだつて本気で支配人を部屋に入れろ
 などと要求するはずはないのだ。だが、あとになれば適当な口
 実がたやすく見つかるはずのこんなちよつとした無礼なふるま
 いのために、グレゴールがすぐに店から追い払われるなどとい
 うことはありえない。そして、泣いたり説得しようとしたりし
 て支配人の気を悪くさせるよりは、今は彼をそつとしておくほ
 うがずっと賢明なやりかただ、というようにグレゴールには思
 われた。だが、ほかの人びとを当惑させ、彼らのふるまいがむ

りもないと思わせたのは、まさにこのグレゴールの決心のつかない態度だった。

「ザムザ君」と、支配人は今度は声を高めて叫んだ。「いったい、どうしたんだね？ 君は自分の部屋にバリケードを築いて閉じこもり、ただ、イエスとかノーとだけしか返事をしない。ご両親にいらぬ大変なご心配をかけ、——これはただついでにいうんだが——君の商売上の義務をまったくあきらめはてたやりかたでおこたっている。君のご両親と社長とにかわって話しているんだが、どうかまじめになつてすぐはつきりした説明をしろ、私に驚いているよ、まったく。君という人は冷静な分別ある人間だと思つていたが、急に奇妙な気まぐれを見せつけてやろうと思ひ始めたようだね。社長はけさ、君の欠勤の理由はあれだろうとほのめかして聞かせてくれはしたが——つま

り最近君にまかせた回収金のことだ——、私はこの説明が当つていゝるはずはない、とほんとうにほとんど誓いを立てんばかりにして取りなしておいた。ところが、こうやって君の理解がたい頑固さを見せつけられては、ほんの少しでも君の味方をする気にはまったくなれないよ。それに、君の地位はけつしてそれほど安定したものでじゃない。ほんとうは君にこうしたことを二人きりでいうつもりだったが、君がこうやって無益に私に手間取らせるんだから、ご両親にも聞かれていけないとは思われなくなつた。つまり君の最近の成績はひどく不満なものだつた。今はかくべつ商売がうまくいく季節ではない、ということのはわれわれもみとめる。しかし、全然商売ができんなんていう季節はあるものではないよ。ザムザ君、そんなものはあるはずがないよ」

「でも、支配人さん」と、グレゴールはわれを忘れて叫び、興奮のあまりほかのすべては忘れてしまった。「すぐ、今すぐ開けますよ。ちよつと身体の工合が悪いんです。目まいがしたんです。それで起きることができませんでした。今もまだベッドに寝ているんです。でも、もうすっかりさっぱりしました。今、ベッドから降りるところです。ちよつとご辛抱下さい！ まだ思つたほど調子がよくありません。でも、もうなりました。病氣というものはなんて急に人間を襲ってくるものでしょう！ ゆうべはまだまったく調子がよかつたんです。両親がよく知っています。でも、もつと正確にいうと、ゆうべすでにちよつとした予感があつたんです。人が見れば、きつと私のそんな様子に気がついたはずです。なぜ店に知らせておかなかつたんでしょう！ でも、病氣なんて家で寝なくなつてなおるだろう、といつ

でも思っているものですから。支配人さん！ 両親をいたわつてやつて下さい！ あなたが今、私におつしやつている非難は、みんないわれがありません。これまでになんかそんなことは一ことだつていわれたことはありません。あなたはおそらく、私がお送りした最近の注文書類をまだ読んではおられないのでしよう。ともあれ、これから八時の汽車で商用の旅に出かけます。一、二時間休んだので、元氣になりました。どうかお引き取り下さい、支配人さん。私はすぐ自分で店へいきます。そして、すみませんがどうか社長にこのことを申し上げて下さい」

そして、グレゴールはこうしたことを急いでしゃべりまくり、自分が何をいつているのかほとんどわからなかつたが、きつとベッドですでに習いおぼえた練習のおかげだろうか、たやすくたんすへ近づいて、それにすがつて起き上がろうとした。ほん

とうにドアを開け、ほんとうに姿を見せて、支配人と話そうと
 思ったのだった。今こんなに自分に会いたがつている人たちが、
 自分を見てなんとというか、彼はそれを知りたくてたまらなかつ
 た。もし彼らがびつくりしたならば、もうグレゴールには責任
 がないわけで、落ちついていえることができる。ところで、もし
 みんなが平気でいるならば、彼としても興奮する理由はないし、
 急げば八時にはほんとうに駅へいけるはずだ。最初、彼は二、
 三回すべすべしたたんすから滑り落ちたが、ついに最後の一跳
 びをやって立ち上がった。下半身の痛みは燃えるように痛んだ
 が、もう全然気にもかけなかった。今度は、近くにあつた椅子
 のもたれに身体を倒し、小さな脚を使ってそのへりにしがみつ
 いた。それによつて自分を抑えることができたので、しゃべる
 こともやめた。というのは、今では支配人のいうことに耳を傾

けることができるようになっていた。

「息子さんのいわれることが一ことでもわかりましたか」と、支配人は両親にたずねた。「われわれをばかにしているんじゃないでしょうね？」

「とんでもないことです」と、母親はもう泣きながら叫んだ。「あの子はきつと大病なんです。それなのにわたしたちはあの子を苦しめたりして。グレーテ！ グレーテ！」と、母親は大声でいった。

「なあに？」と、妹が別な側から叫んだ。両方はグレゴールの部屋越しに言葉を交わしていたのだ。

「すぐお医者様のところへいっておくれ。グレゴールが病気になるだよ。グレゴールが今しゃべったのを聞いたかい？」

「ありやあ、まるでけものの声だった」と、支配人がいったが、

その言葉は母親の叫び声に比べると目立って低かった。

「アンナ！ アンナ！」と、父親は玄関の間越しに台所へ向つて叫び、手をたたいた。「すぐ鍵屋を呼んできてくれ！」

すぐさま、二人の娘はスカート之音を立てながら玄関の間を
かけ抜けていった——いったい妹はどうやってあんなに早く服
を着たのだらう——。そして、玄関のドアをさつと開けた。ド
アの閉じる音は全然聞こえなかった。二人はきつとドアを開け
放しにしていったのだ。大きな不幸が起つた家ではそうしたこ
とはよくあるものだ。

だが、グレゴールはずつと平静になっていた。それでは、人
びとはもう彼が何をいつているのかわからなかったのだ。自分
の言葉ははつきりと、さつきよりもはつきりとしているように
思えたのだが、おそらくそれは耳が慣れたためなのだらう。そ

れにしても、ともかく今はもう、彼の様子が普通でないということとはみんなも信じており、彼を助けるつもりでいるのだ。最初の処置がとられたときの確信と冷静さが、彼の気持をよくした。彼はまた人間の仲間に入れられたと感じ、医師と鍵屋とをきちんと区別することなしに、この両者からすばらしく驚くべき成果を期待した。さし迫っている決定的な話合いのためにできるだけはつきりした声を準備しておこうと思つて、少し咳払いしたが、とはいえずっかり音を抑えてやるように努力はした。おそらくこの物音も人間の咳払いとはちがったふうに響くだろうと思われたからだつた。彼自身、それを判断できるといふ自信はもうなくなつていた。そのあいだに、隣室はすっかり静まり返つていた。おそらく両親は支配人といつしよにテーブルのところ坐り、ひそひそ話しているのだろう。それとも、

みんなドアに身をよせて、聞き耳を立てているのかもしれない。

グレゴールは椅子といっしょにゆっくりとドアへ近づいていき、そこで椅子を放し、ドアに身体をぶつけて、それにすがつてまっすぐに立ち上がった——小さな足の裏のふくらみには少しねばるものがついていたからだ。——そして、そこで一瞬のあいだ、これまで骨の折れた動作の休憩をした。それから、鍵穴にはまっている鍵を口で廻す仕事に取りかかった。残念なことに、歯らしいものがないようだった——なんですぐ鍵をつかんだらいいのだろうか——。ところが、そのかわり顎あごはむろんひどく頑丈がんじょうで、その助けを借りて実際に鍵を動かすことができたが、疑いもなく身体はどこかを傷つけてしまったことには気づかなかつた。傷ついたというのは、褐色の液体が口から流れ出し、鍵の上を流れて床へしたたり落ちたのだった。

「さあ、あの音が聞こえませんか」と、隣室の支配人がいった。
「鍵を廻していますよ」

その言葉は、グレゴールにとつては大いに元気づけになった。だが、みんなが彼に声援してくれたっていいはずなのだ。父親も母親もそうだ。「グレゴール、しっかり。頑張つて！ 鍵にしっかりとつかまれよ」と、両親も叫んでくれたっていいはずだ。そして、みんなが自分の努力を緊張して見守っているのだ、と思ひ描きながら、できるだけの力を振りしぼつて気が遠くなるほど鍵にかみついた。鍵の回転が進行するにつれ、彼は鍵穴のまわりを踊るようにして廻つていった。今はただ口だけで身体をまっすぐに立てていた。そして、必要に応じて鍵にぶらさがったり、つぎにまた自分の身体の重みを全部かけてそれを押し下げたりした。とうとう開いた鍵のぱちりという澄んだ音が、

夢中だったグレゴールをはつきり目ざませた。ほつと息をつきながら、彼は自分に言い聞かせた。

「これなら鍵屋はいらなかつたわけだ」

そして、ドアをすつかり開けようとして、ドアの取手の上に頭をのせた。

彼はこんなふうにしてドアを開けなければならなかつたので、ほんとうはドアがもうかなり開いたのに、彼自身の姿はまだ外からは見えなかつた。まずゆつくりとドア板のまわりを伝わつて廻つていかなければならなかつた。しかも、部屋へ入る前にどきりと仰向けに落ちまいと思うならば、用心してやらなければならなかつた。彼はまだその困難な動作にかかりきりになつていて、ほかのことに注意を向けるひまがなかつたが、そのとき早くも支配人が声高く「おお！」と叫ぶのを聞いた——まるで

風がさわぐときのよう響いた——。そこで支配人の姿も見たが、ドアのいちばん近くにいた支配人はばかりと開けた口に手をあてて、まるで目に見えない一定の強さを保った力に追い払われるように、ゆつくりとあとしざりしていった。母親は——支配人がいるにもかかわらず、ゆうべからといてある逆立った髪のままそこに立っていたが——まず両手を合わせて父親を見つめ、つぎにグレゴールのほうに二歩進み、身体のまわりにぱつと拡がったスカートのまんなかへなへたと坐りこんでしまった。顔は胸へ向つてうなだれており、まったく見えなかつた。父親は敵意をこめた表情で拳こぶしを固め、まるでグレゴールを彼の部屋へ突きもどそうとするようだった。そして、落ちつかぬ様子で居間を見廻し、つぎに両手で眼をおおうと、泣き出した。そこで父親の頑強そうな大きな胸がうちふるえるのだった。

グレゴールはむこうの部屋へは入っていないが、すっかりかけ金をかけてあるドア板に内側からよりかかっていたので、彼の身体は半分しか見えぬ、その上につけている斜めにかしげた頭が見えるのだった。彼はその頭でほかの人びとのほうをのぞいていた。そのあいだに、あたりは前よりもずっと明るくなっていた。通りのむこう側には、向かい合つて立つている限りなく長い黒灰色の建物の一部分が、はつきりと見えていた——病院なのだ——。その建物の前面は規則正しく並んだ窓によつてぽかりぽかりと孔あなをあけられていた。雨はまだ降つていたが、一つ一つ見わけることのできるほどの大きな雨粒で、地上に落ちるしずくも一つ一つはつきりと見えた。テーブルの上には朝食用の食器がひどくたくさんのついていた。というのは、父親にとつては朝食は一日のいちばん大切な食事で、いろいろな新聞を讀

みながら何時間でも引き延ばすのだった。ちょうどまむかいの壁には、軍隊時代のグレゴールの写真がかかっている。中尉の服装をして、サーベルに手をかけ、のんきな微笑を浮かべながら、自分の姿勢と軍服とに対して見る者の敬意を要求しているようだ。玄関の間へ通じるドアは開いており、玄関のドアも開いているので、ドアの前のたたきと建物の下へ通じる階段の上のほうとが見えた。

「それでは」と、グレゴールはいったが、自分が冷静さを保っているただ一人の人間なのだということをはつきりと意識していた。「すぐ服を着て、商品見本を荷造りし、出かけることにします。あなたがたは、私を出かけさせるつもりでしょうね？」とここで、支配人さん、ごらんのとおりに、私は頑固じゃありませんし、仕事は好きなんです。商用旅行は楽じゃありませんが、旅行

しないでは生きることはできないでしょうよ。ところで、支配人さん、どちらへいらつしやいますか？ 店へですか？ 万事をありのままに伝えて下さるでしょうね？ だれだつて、ちよつとのあいだ働くことができなくなることはありませんが、そういうときこそ、それまでの成績を思い出して、そのあとで障害が除かれればきつとそれだけ勤勉に、それだけ精神を集中して働くだらう、ということを考えるべき時なのです。私は実際、社長さんをとともありがたいと思つています。それはあなたもよくご存じのはずです。一方、両親と妹とのことも心配していません。私は板ばさみになつてゐるわけですが、きつとまた切り抜けるでしょう。今でもむずかしいことになつてゐるのに、もうこれ以上私の立場をむずかしくはしないで下さい。店でも私の味方になつて下さいませんか。旅廻りのセールスマンなんて好

かれません。それは私にもよくわかつています。セールスマン
 はしこたまもうけて、それでいい暮しをやっている、と考えら
 れているんです。そして、現実の姿もこうした偏見を改めるよ
 うにうながすものではないことも、私にはわかつています。で
 も、支配人さん、あなたはほかの店員たちよりも事情をよく見
 抜いておられます。いや、それどころか、ないしょの話ですが、
 社長自身よりもよく見抜いておられるんです。社長は事業主と
 しての立場があるため、判断を下す場合に一人の使用人にとつ
 て不利なまちがいを犯すものなんです。あなたもよくご存じの
 ように、ほとんど一年じゅう店の外にいる旅廻りのセールスマ
 ンは、かげ口や偶然やいわれの無い苦情の犠牲になりやすく、
 そうしたものを防ぐことはまったくできないんです。というの
 も、そういうことの多くは全然耳に入つてこず、ただ疲れはて

て旅を終えて帰宅したときにだけ、原因なんかもうわからないような悪い結果を自分の身体に感じる事ができるんですからね。支配人さん、どうかお帰りになる前には、少なくとも私の申し上げたほんの一部分だけでももつともだ、と思つて下さつてゐることを見せて下さるような言葉を一ことおっしゃつて下さい」

だが支配人は、グレゴールの最初の言葉を聞くと早くも身体をそむけ、ただぴくぴく動く肩越しに、唇をそっくり返らしてグレゴールのほうを見返るだけだった。そして、グレゴールがしゃべつてゐるあいだじゆう、一瞬のあいだもじつと立つてはいず、グレゴールから眼をはなさずにドアのほうへ遠ざかつていくのだった。とはいつても、まるでこの部屋を出ていつてはならないという秘密の命令でもあるかのように、急がずにじわ

じわと離れていく。彼はついに玄関の間までいった。そして、彼が最後の一足を居間から引き抜いたすばやい動作を見たならば、この人はそのときかかとにやけどをしたのだ、と思いかねないほどだった。で、玄関の間では、右手をぐつと階段のほうにのぼし、まるで階段ではこの世のものではない救いが自分を待っていているのだ、というような恰好だった。

支配人をどんなことがあつてもこんな気分で立ち去らせてはならない。そんなことをやったら店における自分の地位はきつとぎりぎりまであぶなくなるにちがいない、とグレゴールは見て取った。両親にはそうしたことが彼ほどにはわかつていないのだ。両親は永年のうちに、グレゴールはこの店で一生心配がないのだ、という確信を築き上げてしまっているし、おまけに今は当面の心配ごとにあんまりかかりきりになっているので、

先のことなど念頭にはない始末だった。だが、グレゴールはこの先のことを心配したのだ。支配人を引きとめ、なだめ、確信させ、最後には味方にしなければならぬ。グレゴールと家族との未来はなんといつてもそのことにかかっているのだ！ ああ、妹がこの場に来てくれたらいいのに！ 妹はりこう者だ。さつきも、グレゴールが落ちつき払って仰向けに寝ていたとき、泣いていた。それに、女には甘いあの支配人も、妹にくどかれれば意見を変えるだろう。妹なら玄関のドアを閉め、玄関の間で支配人の驚きを何とかなだめたことだろう。ところが、妹はちようど居合わせず、グレゴール自身がやらなければならぬのだ。そこで、身体を動かす自分の現在の能力がどのくらいあるかもまだ全然わからないということを忘れ、また自分の話はおそらくは今度もきつと相手に聞き取ってはもらえないだろう

ということも忘れて、ドア板から離れ、開いている戸口を通つて身体をずらしていき、支配人のところへいこうとした。支配人はもう玄関の前のたたきにある手すりに滑稽な恰好で両手でしがみついていたのだつた。ところが、グレゴールはたちまち、何かつかまるものを求めながら小さな叫びを上げて、たくさんの小さな脚を下にしたままばかりと落ちた。そうなるかならぬときに、彼はこの朝はじめて身体が楽になるのを感じた。たくさんの小さな脚はしつかと床を踏まえていた。それらの脚は完全に思うままに動くのだ。それに気づくと、うれしかった。それらの脚は、彼がいこうとするほうへ彼を運んでいこうとさえするのだつた。そこで彼は早くも、いっさいの悩みはもうこれですつかり解消するばかりになつたぞ、と思つた。だが、その瞬間、抑えた動きのために身体をぶらぶらゆすりながら、母親

からいくらも離れていないところで母親とちやうど向かい合つて床の上に横たわつたときに、まったく放心状態にあるように見えた母親ががばと高く跳とび上がり、両腕を大きく拡げ、手の指をみんな開いて、叫んだのだつた。

「助けて！ どうか助けて！」

まるでグレゴールをよく見ようとするかのように、頭を下に向けていたのだが、その恰好とは逆に思わず知らずうしろへすたすたと歩いていった。自分のうしろには食事の用意がしてあるテーブルがあることを忘れてしまつていた。そして、テーブルのところへいきつくと、放心したようになって急いでそれに腰を下ろし、自分のすぐそばでひっくり返つた大きなコーヒー・ポットからだくだくだくコーヒーじゆうたんが絨毯の上へこぼれ落ちるのにも全然気づかない様子だつた。

「お母さん、お母さん」と、グレゴールは低い声で言い、母親のほうを見上げた。一瞬、支配人のことはまったく彼の念頭から去っていた。そのかわり、流れるコーヒーをながめて、何度か顎をぱくぱく動かさないではいられなかった。それを見て母親は改めて大きな叫び声を上げ、テーブルから逃げ出し、かけていった父親の両腕のなかに倒れてしまった。しかし、今はグレゴールには両親をかまっているひまがなかった。支配人はもう玄関の外の階段の上にいた。手すりの上に顎をのせ、最後にこちらのほうへ振り返っている。グレゴールはできるだけ確実に追いつこうとして、スタートを切った。支配人は何か勘づいたにちがいがなかった。というのは、彼は何段も一足跳びに降りると、姿を消してしまったのだった。逃げていきながらも、「ひゃあ！」と叫んだ。その叫び声が建物の階段部じゅうに響いた。

まずいことに、支配人のこの逃亡は、それまで比較的落ちついていた父親をも混乱させたようだった。父親は自分でも支配人のあとを追っていくとか、あるいは少なくとも支配人のあとを追おうとするグレゴールのじゃまをしないとかいうのではなくて、支配人が帽子とオーバーといっしょに椅子の一つの上に置き忘れていったステッキを右手でつかみ、左手では大きな新聞をテーブルから取って、足を踏み鳴らしながら、ステッキと新聞とを振ってグレゴールを彼の部屋へ追い返すことに取りかかった。グレゴールがいくら頼んでもだめだし、いくら頼んでも父親には聞き入れてもらえなかった。どんなにへりくだって頭を廻してみても、父親はただいよいよ強く足を踏み鳴らすだけだ。むこうでは母親が、寒い天候にもかかわらず窓を一つ開け放ち、身体をのり出して顔を窓からずつと外に出したまま、両手のな

かに埋めている。通りと階段部とのあいだには強く吹き抜ける風が立って、窓のカーテンは吹きまくられ、テーブルの上の新聞はがさがさいうし、何枚かの新聞はばらばらになつて床の上へ飛ばされた。父親は容赦なく追ひ立て、野蛮人のようにしつしつというのだった。ところで、グレゴールはまだあとしぎりの練習は全然していなかつたし、また実際、ひどくのろのろとしか進めなかつた。グレゴールが向きを変えることさえできなかったら、すぐにも自分の部屋へいけたことだろうが、手間のかかる方向転換をやつて父親をいらいらさせることを恐れたのだった。それに、いつ父親の手ににぎられたステッキで背中か頭かに致命的な一撃をくらうかわからなかつた。だが、結局のところ、向きを変えることのほかに残された手だてはなかつた。というの、びつくりしたことに、あとしぎりにしていくのではけつし

て方向をきちんと保つことができないとわかつたのだつた。そこで彼は、たえず不安げに父親のほうに横眼を使いながら、できるだけすばやく向きを変え始めた。しかし、実のところその動作はひどくのろのろとしかできなかつた。おそらく父親も彼の善意に気づいたのだろう。というのは、彼の動きのじやまはしないで、ときどき遠くのほうからステッキの尖端でその方向転換の動作の指揮を取るような恰好をするのだった。父親のあの耐えがたいしっしつという追い立ての声さえなかつたら、どんなによかつたらう！ それを聞くと、グレゴールはまったく度を失つてしまう。もうほとんど向きを変え終つたというのに、いつでもこのしっしつという声に気を取られて、おろおろしてしまい、またもや少しばかりもとの方向へもどつてしまうのだ。だが、とうとううまい工合に頭がドアの口まで達したが、ところ

が彼の身体の幅が広すぎて、すぐには通り抜けられないということがわかった。グレゴールが通るのに十分な通り路をつくるために、もう一方のドア板を開けてやるなどということとは、今のような心の状態にある父親にはむろんのことまったく思いつくはずがなかった。父親の思いこんでいることは、ただもうグレゴールをできるだけ早く部屋へいかせるということだけだった。グレゴールはまず立ち上がって、おそらくその恰好でドアを通り抜けることができるのだろうか、そのためにグレゴールがしなければならぬ廻りくどい準備も、父親はけっして許そうとはしないだろう。おそらく、まるで障害などはないかのようによ、今は格別にさわぎ立ててグレゴールを追い立てているのだ。グレゴールのうしろで聞こえているのは、もうこの世でただ一人の父親の声のようには響かなかつた。そして、ほんとうのとき

ろ、もう冗談ごとではなかった。そこでグレゴールは、どうとでもなれという気持になって、ドアに身体を押しこんだ。身体の片側がもち上がり、彼はドア口に斜めに取りついてしまった。一方のわき腹がすっかりすりむけ、白色のドアにいやらしいしみがのこった。やがて彼はすっかりはさまってしまい、ひとりではもう動くこともできなかつた。身体の一方の側の脚はみな宙に浮かび上がってしまい、もう一方の側の脚は痛いほど床に押しつけられている。——そのとき、父親がうしろから今はほんとうに助かる強い一突きを彼の身体にくれた。そこで彼は、はげしく血を流しながら、部屋のなかの遠くのほうまですっ飛んでいった。そこでドアがステッキでばたんと閉じられ、やがて、ついにあたりは静かになった。

夕ぐれの薄明りのなかでグレゴールはやつと重苦しい失心したような眠りから目ざめた。きつと、別に妨げがなくともそれほど遅く目ざめるといふようなことはなかつたろう。というのは、十分に休んだし、眠りたりた感じであつた。しかし、すばやい足音と玄関の間に通じるドアを用心深く閉める物音とで目をさまされたように思えるのだつた。電気の街燈の光が蒼白く天井と家具の上部とに映っていたが、下にいるグレゴールのまわりは暗かつた。今やつとありがたみがわかつた。触角でまだ不器用げに探りながら、身体をのろのろとドアのほうへずらしていつて、そこで起つたことを見ようとした。身体の左側はただ一本の長い不愉快に引きつる傷口のように思えたが、両側に並

んでいる小さな脚で本格的なびつこを引かなければならなかつた。それに一本の脚は午前の事件のあいだに重傷を負っていた——ただ一本しか負傷していないことは、ほとんど奇蹟だった——。そして、その脚は死んでうしろへひきずられていた。

ドアのところをやつと、なんでそこまでおびきよせられていったのか、わかつた。それは何か食べものの匂いだつた。というのは、そこには甘いミルクを容れた鉢はちがあり、ミルクのなかには白パンの小さな一切れが浮かんでいた。彼はよろこびのあまりほとんど笑い出すところだつた。朝よりも空腹はひどく、すぐ眼の上まで頭をミルクのなかに笑つこんだ。だが、間もなく失望して頭を引っこめた。扱いにくい身体のため左側のために食べることがむずかしいばかりでなく——そして、身体全体がふうふういいながら協力してやつと食べることができたのだ——、

その上、ふだんは彼の好物の飲みものであり、きつと妹がそのために置いてくれたのだろうが、ミルクが全然うまくない。それどころか、ほとんど厭気をおぼえて鉢から身体をそむけ、部屋の中央へはつてもどつていった。

グレゴールがドアのすきまから見ると、居間にはガス燈がともっていた。ふだんはこの時刻には父親が午後に出た新聞を母親に、そしてときどきは妹にも声を張り上げて読んで聞かせるのをつねにしていたのだが、今はまったく物音が聞こえなかった。妹がいつも彼に語ったり、手紙に書いたりしていたこの朗読は、おそらく最近ではおよそすたれてしまっていたようだった。だが、たしかに家は空ではないはずなのに、あたりもすっかり静まり返っていた。「家族はなんと静かな生活を送っているんだろう」と、グレゴールは自分に言い聞かせ、暗闇のなかを

じつと見つめながら、自分が両親と妹とにこんなりっぱな住居でこんな生活をさせることができることに大きな誇りをおぼえた。だが、もし今、あらゆる安静や幸福や満足が恐怖で終りを告げることになったらどうだろうか。こんな考えに迷いこんでしまわないように、グレゴールはむしろ動き出し、部屋のなかをあちこちはい廻った。

長い夜のあいだに、一度は一方の側のドアが、一度はもう一方のが、ちよつとだけ開き、すぐにまた閉められた。だれかがきつと部屋のなかへ入る用事があつたにちがいないのだが、それにしろためらいもあまりに大きかったのだ。そこでグレゴールは居間へ通じるドアのすぐそばにとまっていて、ためらつてゐる訪問者を部屋のなかへ入れるか、あるいは少なくともその訪問者がだれかを知ろうと決心していた。ところが、ドアはも

う二度と開かれず、グレゴールが待つていたこともむなしかった。ドアがみな閉ざされていた朝には、みんなが彼の部屋へ入ろうとしたのだったが、彼が一つのドアを開け、ほかのドアも昼のあいだに開けられたようなのに、今となつてはだれもやつてはこず、鍵も外側からさしこまれていた。

夜遅くなつてからやつと、居間の明りが消された。それで、両親と妹とがそんなに長いあいだ起きていたことが、たやすくわかつた。というのは、はつきり聞き取ることができたのだが、そのとき三人全部が爪先で歩いて遠ざかつていったのだった。それでは朝までもうだれもグレゴールの部屋へは入つてこないというわけだ。だから、自分の生活をここでどういふふうに設計すべきか、じやまされずにとつくり考える時間がたつぷりであるわけだ。だが、彼が今べつたり床にへばりつくようにしい

られている天井の高いひろびろとした部屋は、なぜか理由を見出すことはできなかつたけれども、彼の心を不安にした。なにしろ五年来彼が住んでいた部屋なので、どうしてそんな気になるのかわからなかつた。——そして、半ば無意識に身体の向きを変え、ちよつと恥かしい気持がないわけではなかつたが、急いでソファの下にもぐりこんだ。そこでは、背中が少し抑えつけられるし、頭をもうもたげることができないにもかかわらず、すぐひどく居心地がよいように思われた。ただ、身体の幅が広すぎて、ソファの下にすっぽり入ることができないのが残念だつた。

そこに彼は一晚じゆういた。その夜は、あるいは空腹のためにあたえず目をさまさせられながらもとうとうとしたり、あるいは心配やはつきりしない希望に思いふけつたりしなから、過ごし

たのだった。そんな心配や希望を思つても結論は同じで、さしあたりは平静な態度を守り、忍耐と細心な遠慮とによつて家族の者たちにさまざま不快を耐えられるようにしてやらねばならぬという結論だつた。そうした不快なことを彼の現在の状態においてはいつかは家族の者たちに与えないわけにはいかないのだ。

つぎの朝早く、まだほとんど夜のうちだつたが、グレゴールは早くも固めたばかりの決心をためしてみる機会をもつた。というのは、玄関の間の方からほとんど完全に身づくろいした妹がドアを開け、緊張した様子でなかをのぞいたのだつた。妹はすぐには彼の姿を見つげなかつたが、彼がソファの下にいるのをみとめると——どこかにいるにきまつてゐるではないか。飛んで逃げることなんかできなかつたのだ——ひどく驚いたの

で、度を失つてしまつて外側からふたたびドアをぴしゃりと閉めてしまった。だが、自分の態度を後悔してでもいるかのよう
に、すぐまたドアを開け、重病人か見知らぬ人間かのところに
いるような恰好で爪先で歩いて部屋のなかへ入つてきた。グレ
ゴールは頭をソファのへりのすぐ近くまでのぼして、妹をなが
めた。ミルクをほつたらかしたのに気づくだろうか。しか
もけつして食欲がないからではなかつたのだ。また、彼の口
もつと合うような別な食べものをもつてくるのだろうか。妹が
自分でそうしてくれないだろうか。妹にそのことを注意するく
らいなら、飢え死したほうがましだ。それにもかかわらず、ほ
んとうはソファの下から跳び出して、妹の足もとに身を投げ、
何かうまいものをくれといいたくてたまらないのだつた。ここ
ろが、妹はまだいっぱい入つているミルクの鉢にすぐ気づいて、

不思議そうな顔をした。鉢からは少しばかりのミルクがまわりにこぼれているだけだった。妹はすぐ鉢を取り上げたが、それも素手ではなくて、ぼろ切れでやるのだった。そして、鉢をもつて出ていった。グレゴールは、妹がかわりに何をもつてくるだろうかとひどく好奇心に駆られ、それについてじつにさまざまなことを考えてみた。しかし、妹が親切心から実際にもつてきたものを、考えただけではあてることがはできなかつたにちがいない。彼の嗜好しこうをためすため、いろいろなものを選んできて、それを全部、古い新聞紙の上に拡げたのだった。半分腐った古い野菜、固まつてしまった白ソースにくるまつた夕食の食べ残りの骨、一粒二粒の乾ぶどうとアーモンド、グレゴールが二日前にまずくて食えないといったチーズ、何もぬつてはないパン、バターをぬつたパン、バターをぬり、塩味をつけたパン。なお

そのほかに、おそらく永久にグレゴール専用ときめたらしい鉢を置いた。それには水がつかれてあつた。そして、グレゴールが自分の前では食べないだろうということを妹は知っているの
で、思いやりから急いで部屋を出ていき、さらに鍵さえかけてしまつた。それというのも、好きなように気楽にして食べてもいいのだ、とグレゴールにわからせるためなのだ。そこで食事に取りかかると、グレゴールのたくさんの小さな脚はがさがさ
いった。どうも傷はみなすでに完全に癒つたにちがひなかつた。もう支障は感じなかつた。彼はそのことに驚き、一月以上も前にナイフでほんの少しばかり指を切つたが、その傷がおとともまだかなり痛んだ、ということを考えて。「今では敏感さが減つたのかな」と、彼は思い、早くもチーズをがつつ食べ始めた。ほかのどの食べものよりも、このチーズが、たちまち、彼

を強くひきつけたのだった。つぎつぎと勢いきつて、また満足のあまり眼に涙を浮かべながら、彼はチーズ、野菜、ソースと食べていった。ところが新鮮な食べものはうまくなかった。その匂いがまつたく我慢できず、そのために食べようと思う品を少しばかりわきへ引きずっていったほどだった。もうとつくにすべてを平らげてしまい、その場でのうのうと横になっていたとき、妹は彼に引き下がるようにと合図するため、ゆつくりと鍵を廻した。彼はもうほとんどとうとうとしていたのにもかかわらず、その音でたちまち驚かされてしまった。彼はまたソファの下へ急いでもぐった。だが、妹が部屋にいるほんの短い時間であつても、ソファの下にとどまっているのには、ひどい自制が必要だった。というのは、たつぷり食事をしたため、身体が少しふくらんで、ソファの下の狭い場所ではほとんど呼吸する

ことができなかつた。何度か微かに息がつまりそうになりながら、いくらか涙が出てくる眼で彼はながめたのだが、何も気づいていない妹は箒で残りものを掃き集めるばかりでなく、グレゴールが全然手をつけなかつた食べものまで、まるでもう使えないのだというように掃き集めた。そして、そうしたものを全部、バケツのなかへ捨て、木の蓋をして、それからいつさいのものを部屋の外へ運び出していった。妹が向きを変えるか変えないかのうちに、グレゴールは早くもソファの下からはい出て、身体をのぼし、息を入れた。

こういうふうにして毎日グレゴールは食事を与えられた。一回は朝、両親と女中とがまだ眠っているときで、二回目はみんなの昼食が終つたあとだ。というのは、食事後、両親はしばらく昼寝をし、女中は妹から何か用事を言いつけられて使いに出

される。たしかにみんなはグレゴールを飢え死させようとはしなかつたが、おそらく彼の食事についてはただ妹の口から伝え聞くという以上の我慢はできなかつたのだらう。またきつと妹も、なにしろほんとうに両親は十分苦しんでいるのだから、おそらくほんのわずかな悲しみだけであつてもはぶいてやろうとしているのだらう。

あの最初の朝、どんな口実によつて医者と鍵屋とを家から追い返したのか、グレゴールは全然知ることができなかつた。というのは、彼のいうことは相手には聞き取れないので、だれ一人として、そして妹までも、彼のほうでは他人のいうことがわかる、とは思わなかつたのだ。そこで、妹が自分の部屋にいるときにも、ただときどき妹が溜息をもらしたり、聖人たちの名前を唱えるのを聞くだけで満足しなればならなかつた。のち

になつて妹が少しはすべてのことに慣れるようになったときをはじめ、——完全に慣れるというようなことはむろんけつして問題とはならなかつた——グレゴールは親しさをこめた言葉とか、あるいはそう解釈される言葉とかをときどき小耳にはさむことができた。グレゴールが食事をさかんに片づけたときには、「ああ、きょうはおいしかったのね」と、妹は言い、しだいに数しげくくり返されるようになったそれと反対に手をつけていない場合には、ほとんど悲しげにこういうのがつねだつた。

「またみんな手をつけないであるわ」

ところで、グレゴールは直接にはニュースを聞くことができなかったけれども、隣室の話し声をいろいろ聞き取るのだった。人声が聞こえると、彼はすぐそれに近いドアのところへ急いでいき、身体全体をドアに圧しつける。ことにはじめのうちには、

たといただこそそ話にしろ、何か彼についてのことでないよ
うな話はなかつた。二日のあいだ、三度三度の食事に、どうし
たらいいのだらう、という相談をやっているのが聞かれた。と
ころで、食事と食事とのあいだの時間にも、同じ話題が語られ
るのだった。というのは、だれ一人としてひとりだけ留守をし
ようとしなかつたし、またどんなことがあつても住居をすつか
り空にすることはできなかつたので、いつでも家には少なくとも
も家族のうち二人が残っているのだ。女中も最初の日——
女中がこのできごとについて何を知っているのか、またどのく
らい知っているのかは、あまり明らかではなかつたが——すぐ
にひまをくれるようにと膝をついて母親に頼み、その十五分後
に家を出ていくときには、涙ながらにひまを出してもらつたこ
との礼をいつた。まるでこの家で示してもらつた最大の恩恵だ

とでもいうような調子だった。そして、だれも彼女に求めたわけでもないのに、ほんの少しでも人にはもらしませんから、などとひどく本気で誓うのだった。

女中がひまを取ったので、今では妹が母親といっしよに料理もしなければならなかった。とはいっても、それはたいして骨が折れなかった。なにしろほとんど何も食べなかつたのだ。グレゴールはくり返し聞いたのだが、だれかがほかの者に向つて食べるようにとうながしてもむだで、出てくる返事といえばただ「いや、たくさん」とかいうような言葉だけにきまつていた。酒類もおそらく全然飲まないようだった。しよつちゆう妹は父親に、ビールを飲みたくないかとたずね、自分で取りにいくから、と心から申し出るのだが、それでも父親が黙っていると、父が世間態をはばかりて心配している気持を取り除こうとして、

門番のおかみさんにビールを取りにいつてもらつてもいいのだ、
 というのだつた。ところが父親は最後に大きな声で「いらな
 い」と、いう。そして、それでもう二度とビールのことは話されな
 かつた。

最初の日のうちに、父親は早くも母親と妹とに向つて財産状
 態とこれからの見通しとについてすつかり話して聞かせた。と
 きどきテーブルから立ち上がつて、五年前に自分の店が破産し
 たときに救い出した小さな金庫から何か書きつけや帳簿をもつ
 てくるのだつた。手のこんだ鍵を開け、つぎに探しているもの
 を取り出したあとで鍵を閉める音が聞こえてきた。父親のその
 ときの説明は、一面では、グレゴールが監禁生活をするようにな
 つて以来はじめてうれしく思ったことだつた。グレゴールは
 それまで、あの店から父親の手に残されたものは全然ないのだ、

と考えていた。少なくとも父親はグレゴールに対してその反対のことは全然いわなかつた。もつともグレゴールもそのことについて父親にたずねたことはなかつたのではあつた。グレゴールがそのころ氣を使つていたことは、家族全員を完全な絶望へ追いこんだ商売上の不幸をできるだけ早く家族の者たちに忘れさせるために全力をつくすということだつた。そこであの当時彼は特別に熱心に働き始め、ほとんど一夜にしてつまらぬ店員から旅廻りのセールスマンとなつた。セールスマンにはむろん金もうけのチャンスがいろいろあり、仕事の成果はすぐさま歩合の形で現金に変わり、それを家にもち帰つて、驚きよろこぶ家族の眼の前のテーブルの上にならべて見せることができた。あれはすばらしい時期だつた。グレゴールはあとになつてからも、家族全体の経費をまかなうことができ、また、事実まかなつた

だけの金をもうけはしたが、あのはじめのころのすばらしい時期は、少なくとも、あのころの輝かしきで二度くり返されることはなかつた。家人もグレゴールもそのことに慣れ、家人は感謝して金を受け取り、彼もよろこんで金を出すのだったが、特別な気持の温かさというものはもう起こらなかつた。ただ妹だけはグレゴールに対してまだ近い関係をもちつづけていた。グレゴールとはちがつて音楽が大好きで、感動的なほどにヴァイオリンを弾くことができる妹を、来年になったら音楽学校へ入れてやろう、というのが彼のひそかな計画だった。そうなることひどく金がかかるが、そんなことは考慮しないし、またその金もなんとかしてつくることができるだろう。グレゴールが町に帰ってきてちよつと滞在するあいだには、しよつちゆう妹との会話に音楽学校の話が出てくるのだったが、いつでもただ美し

い夢物語にすぎず、その実現は考えられなかった。そして、両親もけっしてこんな無邪気な話を聞くのをよろこびはしなかった。だが、グレゴールはきわめてはつきりとそのことを考えていたのであり、クリスマス前の夜にはそのことをおごそかに宣言するつもりだった。

ドアにへばりついて身体をまつすぐに起こし、聞き耳を立てているあいだにも、今の自分の状態にはまったく無益なこうした考えが、彼の頭を通り過ぎるのだった。ときどき、全身の疲れのためにもう全然聞いていることができなくなり、うっかりして頭をドアにぶつけ、すぐにまたきちんと立てるのだった。というのは、そんなふうにして彼が立てるとんな小さな物音でも、隣室に聞こえ、みんなの口をつぐませてしまうのだ。「また何をやっているんだらう」などと、しばらくして父親がいう。どう

もドアのほうに向きなおっているらしい。それからやつと、中断された会話がふたたびだんだんと始められていく。

グレゴールは十分に聞き取ったのだが——というのは、父親は説明をする場合に何度もくり返すのがつねだった。その理由の一つには彼自身がすでに長いあいだこうしたことに気を使わなくなっていたからであり、もう一つには母親が一回聞いただけでは万事をすぐのみこめなかったからだ——、すべての不幸にもかかわらず、なるほどまったくわすかばかりのものではあるけれども昔の財産がまだ残っていて、手をつけないでおいた利子もそのあいだに少しばかり増えた、ということであった。その上、グレゴールが毎月家に入れていた金も——彼は自分ではほんの一グルデンか二グルデンしか取らなかった——すっかり費われてしまったわけではなく、貯えられてちよつとした金額

になつていた。グレゴールはドアの背後で熱心にうなずき、この思いがけなかつた用心と儉約とをよろこんだ。ほんとうはこの余分な金で社長に対する父親の負債をもつと減らすことができ、この地位から離れることができる日もずっと近くなつたことだろうが、今では父親の計らいは疑いもなくいつそうよかつたわけだ。

ところで、こんな金では家族の者が利息で生活していけるなどというのにはまつたくたりない。おそらく家族を一年か、せいぜいのところ二年ぐらい支えていくのに十分なだけだろう。それ以上のものではなかつた。つまり、ほんとうは手をつけてはならない、そしてまさかのときの用意に取っておかなければならない程度の金額にすぎなかつた。生活費はかせがなければならぬ。ところで、父親は健康だがなにしろ老人で、もう五年

間も全然仕事をせず、いずれにしてもあまり働けるといふ自信はない。骨は折れたが成果のあがらなかつた生涯の最初の休暇であつたこの五年のあいだに、すっかりふとつてしまつて、そのために身体も自由に動かなくなつていた。そこで母親が働かなければならないのだらうが、これが喘息ぜんそくもちで、家のなかを歩くのにさえ骨が折れる始末であつて、一日おきに呼吸困難に陥り、開いた窓の前のソファの上で過ごさなければならぬ。すると妹がかせがなければならぬというわけだが、これはまだ十七歳の子供であり、これまでの生活ではひどく恵まれて育つてきたのだつた。きれいな服を着て、たつぷりと眠り、家事の手伝いをし、ささやかな気ばらしにときどき加わり、何よりもヴァイオリンを弾く、という生活のしかただつた。どうしてこんな妹がかせぐことができるだらうか。家族の話が金をかせが

なければならぬということになると、はじめのうちはグレゴールはいつもドアを離れて、ドアのそばにある冷たい革のソファに身を投げるのだった。というのは、恥辱と悲しみのあまり身体がかつと熱くなるのだった。

しばしば彼はそのソファの上で長い夜をあかし、一瞬も眠らず、ただ何時間でも革をむしっているのだった。あるいは、大変な労苦もいとわず、椅子を一つ窓ぎわへ押ししていき、それから窓の手すりにはい上がって、椅子で身体を支えたまま窓によりかかっていた。以前窓からながめているときに感じた解放されるような気持でも思い出しているらしかった。というのは、実際、少し離れた事物も一日一日とだんだんぼんやり見えるようになっていっていった。以前はしよつちゆう見えていまいました。たまたまなかった向う側の病院も、もう全然見えなくなつて

いた。静かな、しかしまったく都会的であるシャルロッテ街に自分が住んでいるのだということをよく知っていたいなかつたならば、彼の窓から見えるのは、灰色の空と灰色の大地とが見わけられないくらいにつながっている荒野なのだ、と思いかねない有様だった。注意深い妹は二度だけ椅子が窓ぎわにあるのに気づいたにちがいなかつたが、それからは部屋の掃除をしたあとでいつでも椅子をきちんと窓べに押しやり、おまけにそのときからは内側の窓も開け放しておいた。

もしグレゴールが妹と話すことができ、彼女が自分のためにしなければならぬことしたすべのことに対して礼をいうことができるのであったら、彼女の奉仕をもっと気軽に受けることができただろう。ところが、彼はそれが苦しくてたまらなかつた。妹はむろん、いつさいのこのつらい思いをぬぐい去ろう

と努めていたし、時がたつにつれてむろんだんだんそれがうま
くいくようになったのだが、グレゴールも時間がたつとともに
いつさいをはじめのころよりもずっと正確に見て取るようになって
た。妹が部屋へ足を踏み入れるだけで、彼には恐ろしくてなら
なかつた。ふだんはグレゴールの部屋をだれにも見せまいと気
をくばっているのだが、部屋に入ってくるやいなや、ドアを閉
める手間さえかけようとせず、まっすぐに窓へと走りよつて、
まるで息がつまりそうだといわんばかりの恰好であわただしく
両手で窓を開き、まだいくら寒くてもしばらく窓ぎわに立った
ままできて、深呼吸する。こうやって走つてさわがしい音を立
てることで、グレゴールを日に二度びつくりさせるのだ。その
あいだじゅう、彼はソファの下でふるえていた。だが彼にはよ
くわかるのだが、もしグレゴールがいる部屋で窓を閉め切つて

いることができるものならば、きつとこんなことはやりたくはないのだ。

あるとき、グレゴールの変身が起つてから早くも一月がたつていたし、妹ももうグレゴールの姿を見てびっくりしてしまいかくべつの理由などはなくなつていたのだが、妹はいつもよりも少し早くやつてきて、グレゴールが身動きもしないで、ほんとうにおどかさような恰好で身体を立てたまま、窓から外をながめている場面にぶつかった。妹が部屋に入つてこなかつたとしても、グレゴールにとつては意外ではなかつたろう。なにしろそういう姿勢を取つていて、すぐに窓を開けるじやまをしていたわけだからだ。ところが、妹はなかへ入つてこないばかりか、うしろへ飛びのいて、ドアを閉めてしまった。見知らぬ者ならば、グレゴールが妹のくるのを待ちうかがつていて、妹

にかみつこうとしているのだ、と思つたことだろう。グレゴールはむろんすぐソファの下に身を隠したが、妹がまたやつてくるまでには正午まで待たねばならなかつた。そのことから、自分の姿を見ることは妹にはまだ我慢がならないのだし、これからも妹にはずっと我慢できないにちがいない、ソファの下から出ているほんのわずかな身体の部分を見ただけでも逃げ出したいくらいで、逃げ出していかないのはよほど自分を抑えているにちがいないのだ、と彼ははつきり知つた。妹に自分の姿を見せないために、彼はある日、背中に麻布をのせてソファの上まで運んでいった。——この仕事には四時間もかかつた——そして、自分の身体がすっかり隠れてしまうように、また妹がかがみこんでも見えないようにした。もしこの麻布は不必要だと妹が思うならば、妹はそれを取り払つてしまうこともできるだろ

う。というのは、身体をこんなふうにするつもりで閉じこめてしまふことは、グレゴールにとってなぐさみごとなんかではないからだ。ところが、妹は麻布をそのままにしておいた。おまけにグレゴールが一度頭で麻布を用心深く少しばかり上げて、妹がこの新しいしかけをどう思っているのか見ようとしたとき、妹の眼に感謝の色さえ見て取ったように思ったのだつた。

最初の二週間には、両親はどうしても彼の部屋に入ってくる事ができなかつた。これまで両親は妹を役立たずの娘と思つていたのでしばしば腹を立てていたが、今の妹の仕事ぶりを完全にみとめていることを、グレゴールはしばしば聞いた。ところが両親はしばしば、妹がグレゴールの部屋で掃除しているあいだ、二人で彼の部屋の前に待ちかまえていて、妹が出てくるやいなや、部屋のなかがどんな様子であるか、グレゴールが何を食

べたか、そのとき彼がどんな態度を取ったか、きつとちよつと快方へ向いているのが見られたのでないか、などと語つて聞かせなければならなかつた。ところで母親のほうは比較的早くグレゴールを訪ねてみようと思つたのだつたが、父親と妹とがまづいろいろ理にかなつた理由を挙げて母親を押しとどめた。それらの理由をグレゴールはきわめて注意深く聞いていたが、いずれもまづたく正しいと思つた。ところが、あとになると母親を力ずくでとどめなければならなかつた。そして、とめられた母親が「グレゴールのところへいかせて！ あの子はわたしのかわいそうな息子なんだから！ わたしがあの子のところへいかないではいられないということが、あんたたちにはわからないの？」と叫ぶときには、むろん毎日ではないがおそらく週に一度は母親が入つてきたほうがいいのではないかとグレゴ

ルは思った。なんといつても母親のほうが妹よりは万事をよく心得ているのだ。妹はいくらけなげとはいってもまだ子供で、結局は子供らしい軽率さからこんなにもむずかしい任務を引き受けているのだ。

母親に会いたいというグレゴールの願いは、まもなくかなえられた。昼のあいだは両親のことを考えて窓ぎわにはいくまい、とグレゴールは考えていたが、一、二メートル四方の床の上ではたいしてはい廻るわけにいかなくつたし、床の上にじつとしてゐることは夜なかであつても我慢することがむずかしく、食べものもやがてもう少しも楽しみではなくなつていたので、気ばらしのために壁の上や天井を縦横十文字にはい廻る習慣を身につけていた。とくに上の天井にぶら下がっているのが好きだつた。床の上にじつとしてゐるのはまったくちがう。息がいつ

そう自由につけるし、軽い振動が身体のなかを伝わっていく。そして、グレゴールが天井にぶら下がってほとんど幸福な放心状態にあるとき、脚を放して床の上へどすんと落ちて自分でも驚くことがあった。だが、今ではむろん以前とはちがって自分の身体を自由にすることができ、こんな大きな墜落のときでさえけがをすることはなかった。妹は、グレゴールが自分で考え出したこの新しいなぐさみにすぐ気づき——実際、彼ははい廻るときに身体から出る粘液ねんえきの跡をとどこどこに残すのだった、——グレゴールがはい廻るのを最大の規模で可能にさせてやろうということを考え、そのじやまになる家具、ことに何よりもたんすと机とを取り払おうとした。ところが、その仕事はひとりではやれなかった。父親の助けを借りようとは思わなかったし、女中もきつとそれほど役には立たないだろう。というのは、

この十六歳ばかりの少女は、前の料理女がひまを取ってからけなげに我慢していたが、台所の鍵はたえずかけておいて、ただ特別に呼ばれたときだけ開けるだけでよいということにしてくれ、と願ひ出て、許されていたのだった。そこで妹としては、父親がいないときを見計らつて母親をつれていくよりほかに方法がなかつた。興奮したよろこびの声を挙げて母親はやつてきたが、グレゴールの部屋のドアの前で黙りこんでしまった。はじめはむろん妹が部屋のなかが万事ちゃんとしているかどうかを検分したが、つぎにやつと母親を入らせた。グレゴールは大急ぎで麻布をいつそう深く、またいつもよりしわをたくさんつくつてひつかぶつた。全体は実際にただ偶然ソファの上に投げられた麻布のように見えるだけだった。グレゴールは今度も、麻布の下でこつそり様子をうかがうことをやめなかつた。今回

すぐ母親を見ることは断念した。ただ、母親がやつてきたこと
 だけをよろこんだ。「いらつしやいな、見えないわよ」と、妹
 がいった。母親の手を引つ張つてゐるらしかった。二人のかよ
 わい女が相当重い古たんすを置き場所から動かし、無理をする
 のでないかと恐れる母親のいましめの言葉を聞こうとしないで
 妹がたえず仕事の大部分を自分の身に引き受けている様子を、
 グレゴールは聞いていた。ひどく時間がかかった。十五分もか
 かった仕事のあとで、母親はたんすはやつぱりこの部屋に置いて
 おくほうがいいのでないか、と言ひ出した。第一に、重すぎ
 て、二人で父親の帰つてくるまでに片づけることはできないだ
 ろう。それで部屋のまんなかにたんすが残ることになつたら、
 グレゴールの動き廻るのにじゃまになるだろう。第二に、家具
 を取り片づけたらグレゴールがどう思うことかわかつたもので

はない。自分は今のままにしておくほうがいいように思う。何も無い裸の壁をながめると、胸がしめつけられるような気がする。そして、どうしてグレゴールだつてそんな気持がしないはずがあるのか。あの子はずつと部屋の家具に慣れ親しんできたのだから、がらんとした部屋では見捨てられてしまったような気がするだろう。「それに、こんなことをしたら」と、最後に母親は声を低めた。それまでも、ほとんどささやくようにものをいって、グレゴールがどこにいるのかはつきり知らないままに、声の響きさえもグレゴールに聞かれることを避けたいと思つてゐるようであつた。グレゴールが人の言葉を聞きわけることができない、と母親は確信しているのだ。「それに、こんなことをしたら、まるで家具を片づけることによつて、わたしたちがあの子のよくなることをまったくあきらめてしまい、あの子のこ

とをかまわずにほつたらかしにしているということを見せつけるようなものじゃないかい？ わたしたちが部屋をすっかり以前のままにしておくように努め、グレゴールがまたわたしたちのところへもどつてきたときに、なんにも変つていないことを見て、それだけたやすくそれまでのことが忘れられるようにしておくことがいちばんいい、とわたしは思うよ」

母親のこうした言葉を聞いて、直接の人間的な話しかけが自分に欠けていることが、家族のあいだの単調な生活と結びついて、この二カ月のあいだにすっかり自分の頭を混乱させてしまったにちがいない、とグレゴールは知った。というのは、自分の部屋がすっかり空っぽにされたほうがいいなどとまじめに思うようでは、そうとでも考えなければほかに説明のしようがなかった。彼はほんとうに、先祖伝来の家具をいかにも気持よく置い

ているこの暖かい部屋を洞窟どうくつに変えるつもりなのだろうか。がらんどうになればむろんあらゆる方向に障害なくはい廻ることが出来るだろうが、しかし自分の人間的な過去を同時にたちまちすっかり忘れてしまうのではなからうか。今はすでにすっかり忘れようとしているのではないだろうか。そして、長いあいだ聞かなかつた母親の声だけがやつと彼の心を正気にもどしたのではあるまいか。何一つ取りのけてはならない。みんなもとのままに残されていなければならない。家具が自分の状態の上に及ぼすいい影響というものがなくてはならない。そして、たとい家具が意味もなくはい廻るじゃまになつても、それは損害ではなくて、大きな利益なのだ。

ところが、妹の考えは残念なことにちがつていた。妹はグレゴールに関する件の話合いでは両親に対して特別事情に明るい

人間としての態度を取ることに慣れていたし、それもまんざら不当とはいえなかつた。そこで今の場合にも、母親の忠告は妹にとつて、彼女がひとりではじめ動かそうと考えていたたんすと机とを片づけるだけではなく、どうしてもなくてはならないソファは例外として、家具全体を片づけようと固執する十分な理由であつた。妹がこうした要求をもち出すようになったのは、むろんただ子供らしい反抗心と、最近思いがけなくも、そして苦勞してやっと手に入れた自信とのためばかりではなかつた。實際、妹はグレゴールがはい廻るのには広い場所が必要で、それに反して家具はだれも見取ることができるようにはほんの少しでも役に立つわけではない、ということを見て取つていたのでつた。だが、おそらくは彼女の年ごろの少女らしい熱中もそれに加わつたのだらう。そういう熱中しやすい心は、どんな機会に

も満足を見出そうと努めているのであつて、今はこのグレーテという少女を通じて、グレゴールの状態をもつと恐ろしいものにして、つぎに今まで以上にグレゴールのために働きたいという誘惑にかられているのだ。というのは、がらんとした四方の壁をグレゴールがまったくひとりで支配しているような部屋には、グレーテ以外のどんな人間でもけつしてあえて入つてこようとはしないだろう。

そこで妹は母親の忠告によつて自分の決心をひるがえさせられたりしてはいなかつた。母親はこの部屋でももつぱら不安のためにおろおろしているように見えたが、まもなく黙つてしまひ、たんすを運び出すことで力の限り妹を手伝つていた。ところで、たんすはやむをえないとあればグレゴールとしてもなしですませることができたが、机のほうはどうしても残さなければ

ばならない。二人の女がはあはあ言いながらたんすを押して部屋を出ていくやいなや、グレゴールはソファの下から頭を突き出し、どうやったら用心深く、できるだけおだやかにこの取り片づけに干渉できるかを見ようとした。だが、あいにく、はじめにもどつてきたのは母親だった。グレーテのほうは隣室でたんすにしがみつき、それをひとりであちこちとゆすつていたが、むろんたんすの位置を動かすことはできなかつた。だが、母親はグレゴールの姿を見ることに慣れていない。姿を見せたら、母親を病気にしてしまうかもしれない。そこでグレゴールは驚いてあとしがりしてソファの別なはしまで急いでいった。だが、麻布の前が少しばかり動くことを妨げることはもうできなかつた。それだけで母親の注意をひくのは十分だった。母親はぴたりと足をとめ、一瞬じつと立っていたが、つぎにグレーテの

ところへもどつていった。

実のところ何も異常なことが起つてゐるわけではない、ただ一つ二つの家具が置き変えられるだけだ、とグレゴールは何度か自分に言い聞かせたにもかかわらず、彼はまもなくみとめなわけにはいかなくなつたのだが、この女たちの出たり入つたり、彼女らの小さなかけ声、床の上で家具のきしむ音、それらはまるで四方から数を増していく大群集のように彼に働きかけ、頭と脚とをしつかとちぢめて身体を床にびつたりとつけていたけれども、おれはもうこうしたことすべてを我慢できなくなつた。女たちは彼の部屋を片づけているのだ。彼にとって親しかつたいつさいのものを取り上げるのだ。糸の、こやそのほかの道具類が入つてゐるたんすは、二人の手でもう運び出されて

しまった。今度は、床にしつかとめりこんでいる机をぐらぐら動かしている。彼は商科大学の学生として、中学校の生徒として、いやそればかりでなく小学校の生徒として、あの机の上で宿題をやったものだった。——もう実際、二人の女たちの善意の意図をためしているひまなんかないのだ。それに彼は二人がいることなどはほとんど忘れていた。というのは、二人は疲れてしまったためにもう無言で立ち働いていて、彼女たちのどたばたいう重い足音だけしか聞こえなかった。

そこで彼ははい出ていき——女たちはちょうど隣室で少しばかり息を入れようとして机によりかかっているところだった——進む方向を四度変えたが、まず何を救うべきか、ほんとうにわからなかった。そのとき、ほかはすっかりがらんとしてしまつた壁に、すぐ目立つように例の毛皮ずくめの貴婦人の写真がか

かっているのを見た。そこで、急いではい上がっていき、額のガラスにぴたりと身体を押しつけた。ガラスはしつかりと彼の身体をささえ、彼の熱い腹に快感を与えた。少なくとも、グレゴールが今こうやってすっかり被い隠しているこの写真だけはきつとだれももち去りはすまい。彼は女たちかもどつてくるのを見ようとして、居間のドアのほうへ頭を向けた。

母と妹とはそれほど休息を取ってはいないで、早くももどつてきた。グレーテは母親の身体に片腕を廻し、ほとんど抱き運ぶような恰好だった。

「それじゃ、今度は何をもつていきましよう」と、グレーテはいつて、あたりを見廻した。そのとき、彼女のまなざしと壁の上にいるグレゴールのまなざしとが交叉した。きつとただ母親がこの場にいるというだけの理由で度を失わないように気を取

りなおしたのでろう。母親があたりを見廻さないように、妹は顔を母親のほうに曲げて、つぎのようにいった。とはいっても、ふるえながら、よく考えてもみないでいった言葉だった。

「いらつしやい、ちよつと居間にもどらない？」グレーテの意図はグレゴールには明らかであつた。母親を安全なところへつれ出し、それから彼を壁から追い払おうというのだ。だが、そんなことをやってみるがいい！ 彼は写真の上に坐りこんで、渡しはしない。それどころか、グレーテの顔めがけて飛びつこうという身構えだ。

ところが、グレーテがそんなことをいったことが母親をますます不安にしてみました。母親はわきへよつて、花模様の壁紙の上に大きな褐色の一つの斑点をみとめた。そして、自分の見たものがグレゴールだとほんとうに意識するより前に、あらあ

らしい叫び声で「ああ、ああ！」というなり、まるでいつさいを放棄するかのように両腕を払げてソファの上に倒れてしまい、身動きもしなくなつた。

「グレゴールつたら！」と、妹は拳を振り上げ、はげしい眼つきで叫んだ。これは変身以来、妹が彼に向つて直接いつた最初の言葉だつた。妹は母親を気絶から目ざめさせるための氣つけ薬を何か取りに隣室へかけていつた。グレゴールも手伝いたかつた。——写真を救うにはまだ余裕があつた——だが、彼はガラスにしつかとへばりついていて、身体を引き離すためには無理しなければならなかつた。それから自分も隣室へ入つていつた。まるで以前のように妹に何か忠告を与えてやれると、いわんばかりであつた。だが、何もやれないでむなしく妹のうしろに立っていないければならなかつた。いろいろ小壇をひつき廻してい

た妹は、振り返ってみて、またびつくりした。塙が床の上に落ちて、くだけた。一つの破片がグレゴールの顔を傷つけた。何か腐蝕性の薬品が彼の身体のまわりに流れた。グレーテは長いことそこにとどまってははいないで、手にもてるだけ多くの小塙をもつて、母親のところへかけていった。ドアは足でびしゃりと閉めた。グレゴールは今は母親から遮断しゃだんされてしまった。その母親は彼の罪によつておそらくほとんど死にそうになつてゐるのだ。ドアを開けてはならなかつた。自分が入つていくことによつて、母親のそばにいなければならない妹を追い立てたくはなかつた。今は待つてゐるよりほかになんの手だてもなかつた。そして、自責と心配とに駆り立てられて、はい廻り始め、すべてのものの上をはつていった。壁の上も家具や天井の上もはつて歩き、とうとう絶望のうちに、彼のまわりの部屋全体が

ぐるぐる廻り始めたときに、大きなテーブルの上にどたりと落ちた。

ちよつとばかり時が流れた。グレゴールは疲れ果ててそこに横たわっていた。あたりは静まり返っている。きつといいしるしなのだろう。そのとき、玄関のベルが鳴った。女中はむろん台所に閉じこめられているので、グレーテが開けなければならなかった。父親が帰ってきたのだった。「何が起ったんだ？」というのが彼の最初の言葉だった。グレーテの様子がきつとすべてを物語っているにちがひなかった。グレーテは息苦しそうな声で答えていたが、きつと顔を父親の胸にあてているらしい。

「お母さんが気絶したの。でももうよくなつたわ。グレゴールがはい出したの」

「そうなるだろうと思っていた」と、父親がいった。「わしはい

つもお前たちにいつたのに、お前たち女はいうことを聞こうとしないからだ」

父親がグレーテのあまりに手短かな報告を悪く解釈して、グレゴールが何か手荒なことをやったものと受け取ったことは、グレゴールには明らかであった。そのために、グレゴールは今度は父親をなだめようとしなければならなかった。というのは、彼には父親に説明して聞かせるひまもなければ、またそんなことができるはずもないのだ。そこで自分の部屋のドアのところへのがれていき、それにぴったりへばりついた。これで、父親は玄関の間からこちらへ入ってくるときに、グレゴールは自分の部屋へすぐもどろうというきわめて善良な意図をもっているということ、だから彼を追いもどす必要はなく、ただドアを開けてやりさえすればすぐに消えていなくなるだろうということ

を、ただちに見て取ることができはるはずだ。

しかし、父親はこうした微妙なことに気づくような気分にはなっていないかった。入ってくるなり、まるで怒つてもいればよろこんでもいるというような調子で「ああ！」と叫んだ。グレゴールは頭をドアから引つこめて、父親のほうに頭をもたげた。父親が今突つ立っているような姿をこれまで想像してみたことはほんとうになかった。とはいっても、最近では彼は新しいやりかたのはい廻る動作にばかり気を取られて、以前のようになかのほかのできごとに気を使うことをおこたっていたのであり、ほんとうは前とはちがってしまった家の事情にぶつかつても驚かないだけの覚悟ができていなければならぬところだつた。それはそうとしても、これがまだ彼の父親なのだろうか。以前グレゴールが商売の旅に出かけていくとき、疲れたように

ベッドに埋まつて寝ていた父、彼が帰つてきた晩には寝巻のま
 まの姿で安楽椅子にもたれて彼を迎えた父、起き上がることは
 まつたくできずに、よろこびを示すのにただ両腕を上げるだけ
 だった父、年に一、二度の日曜日や大きな祭日にまれにいつしよ
 に散歩に出かけるときには、もともとゆつくりと歩く母親とグ
 レゴールとのあいだに立つて、この二人よりもつとのろのろ
 と歩き、古い外套にくるまり、いつでも用心深く身体に当てた
 撞木杖しゅもくづえをたよりに難儀しながら歩いていき、何かいおうとする
 ときには、ほとんどいつでも立ちどまつて、つれの者たちを自
 分の身のまわりに集めた父、あの老いこんだ父親とこの眼の前
 の人物とは同じ人間なのだろうか。以前とちがつて、今ではき
 ちんと身体を起こして立っている。銀行の小使たちが着るよう
 な、金ボタンのついたぴったり身体に合った紺色の制服を着て

いる。上衣の高くてぴんと張った襟の上には、力強い二重顎が
拡がっている。毛深い眉まゆの下では黒い両眼の視線が元気そうに
注意深く射し出ている。ふだんはぼさぼさだった白髪はひどく
きちんとてかてかな髪形になでつけている。この父親はおそら
く銀行のものだと思われる金モールの文字をつけた制帽を部屋
いっぱいに弧を描かせてソファの上に投げ、長い制服の上衣の
すそをはねのけ、両手をズボンのポケットに突っこんで、にが
にがしい顔でグレゴールのほうへ歩んできた。何をしようとい
うのか、きつと自分でもわからないのだ。ともかく、両足をふ
だんとはちがうくらい高く上げた。グレゴールは彼の靴のかか
とがひどく大きいことにびっくりしてしまった。だが、びっく
りしたままではいられなかった。父親が自分に対してはただ最
大のきびしさこそふさわしいのだと見なしているということ、

彼は新しい生活が始った最初の日からよく知っていた。そこで父親から逃げ出して、父親が立ちどまると自分もとまり、父親が動くときまた急いで前へ逃がれていった。こうして二人は何度か部屋をぐるぐる廻ったが、何も決定的なことは起こらないし、その上、そうした動作の全体がゆっくりとしたテンポで行われるので追跡しているような様子は少しもなかった。そこでグレゴールも今のところは床の上にいた。とくに彼は、壁や天井へ逃げたら父親がかくべつの悪意を受け取るだろう、と恐れたのだった。とはいえ、こうやって走り廻ることも長くはつづかないだろう、と自分にいつて聞かせないではいられなかった。というのは、父親が一步で進むところを、彼は数限りない動作で進んでいかなければならないのだ。息切れが早くもはつきりと表われ始めた。以前にもそれほど信頼の置ける肺をもっていたわけ

ではなかった。こうして全力をふるって走ろうとしてよろよろはい廻つて、両眼もほとんど開けていなかった。愚かにも走る以外に逃げられる方法は全然考えなかつた。四方の壁が自分には自由に歩けるのだということも、もうほとんど忘れてしまつていた。とはいつても、壁はぎざぎざやとがつたところがたくさんある念入りに彫刻された家具でさえぎられていた。——そのとき、彼のすぐそばに、何かがやんわりと投げられて落ちてきて、ごろごろところががつた。それはリンゴだつた。すぐ第二のが彼のほうに飛んできた。グレゴールは驚きのあまり立ちどまつてしまった。これ以上走ることは無益だつた。というのは、父親は彼を爆撃する決心をしたのだつた。食器台の上の果物皿からリンゴを取つてポケットにいっぱいつめ、今のところはそうきちんと狙い^{ねら}をつけずにリンゴをつぎつぎに投げってくる。こ

これらの小さな赤いリングは、まるで電気にかげられたように床の上をころげ廻り、ぶつかり合った。やわらかに投げられた一つのリングがグレゴールの背中をかすめたが、別に彼の身体を傷つけもしないで滑り落ちた。ところが、すぐそのあとから飛んできたのがまさにグレゴールの背中にめりこんだ。突然の信じられない痛みは場所を変えることで消えるだろうとでもいうように、グレゴールは身体を前へひきずっていこうとしたが、まるで釘づけにされたように感じられ、五感が完全に混乱してのびてしまった。だんだんかすんでいく最後の視線で、自分の部屋が開き、叫んでいる妹の前に母親が走り出てきた。下着姿だった。妹が、気絶している母親に呼吸を楽にしてやろうとして、服を脱がせたのだった。母親は父親をめぐけて走りよった。その途中、とめ金はずしたスカートなどがつきつきに床にす

べり落ちた。そのスカートなどにつまづきながら父親のところへかけよつて、父親に抱きつき、父親とぴったり一つになつて——そこでグレゴールの視力はもう失われてしまった——両手を父の後頭部に置き、グレゴールの命を助けてくれるようにと頼むのだった。

III

グレゴールが一月以上も苦しんだこの重傷は——例のリンゴは、だれもそれをあえて取り除こうとしなかつたので、眼に見える記念として肉のなかに残されたままになつた——父親にさえ、グレゴールはその現在の悲しむべき、またいとわしい姿にもかかわらず、家族の一員であつて、そんな彼を敵のように扱

うべきではなく彼に対しては嫌悪をじつとのみこんで我慢すること、ただ我慢することだけが家族の義務の命じるところなのだ、ということをお願い起こさせたらしかつた。

ところで、たとい今グレゴールがその傷のために身体を動かすことがおそらく永久にできなくなってしまうと、今のところは部屋のなかを横切つてはい歩くためにまるで年老いた傷病兵のようにとても長い時間がかかるといっても——高いところをはい廻るなどということとはとても考えることができなかった——、自分の状態がこんなふうに悪化したかわりに、彼の考えによればつぎの点で十分につぐなわれるのだ。つまり、彼がつい一、二時間前にはいつでもじつと見守っていた居間のドアが開けられ、そのために彼は自分の部屋の暗がりのなかに横たわつたまま、居間のほうからは姿が見えず、自分のほうからは明りをつ

けたテーブルのまわりに集つてゐる家族全員を見たり、またいわば公認されて彼らの話を以前とはまったくちがったふうに聞いたりしてもよいということになつたのだつた。

むろん、聞こえてくるのはもはや以前のようになぎやかな会話ではなかつた。グレゴールは以前は小さなホテルの部屋で、疲れきつてしめつぽい寝具のなかに身体を投げなければならぬときには、いつもいくらかの渴望をもつてそうした会話のことを考えたものだつた。ところが今では、たいていはひどく静かに行われるだけだ。父親は夕食のあとすぐに彼の安楽椅子のなかで眠りこんでしまう。母親と妹とはたがいにいましめ合つて静かにしている。母親は明りの下にずっと身体をのり出して流行品を扱う洋品店のためのしやれた下着類をぬつてゐる。売場女店員の地位を得た妹は、晩には速記とフランス語との勉強

をしている。おそらくあとになつたらもつといい地位にありつ
 ぐためなのだろう。ときどき父親が目をさます。そして、自分
 が眠つていたことを知らないかのように、「今晚もずいぶん長い
 こと裁縫をしているね！」といつて、たちまちまた眠りこむ。
 すると、母親と妹とはたがいに疲れた微笑を交わす。

父親は一種の強情さで、家でも自分の小使の制服を脱ぐこと
 を拒んでいた。そして、寝巻は役に立たずに衣裳かぎにぶら下
 がっているが、父親はまるでいつでも勤務の用意ができてい
 るかのように、また家でも上役の声を待ちかまえているかよう
 に、すっかり制服を着たままで自分の席でうたた寝している。
 そのため、はじめから新しくはなかつたこの制服は、母親と妹
 とがいくら手入れをしても清潔さを失つてしまった。グレゴ
 ルはしばしば一晩じゅう、いつも磨かれている金ボタンで光つ

てはいるが、いたるところにしみがあるこの制服をながめていた。そんな服を着たまま、この老人はひどく窮屈に、しかし安らかに眠っているのだった。

時計が十時を打つやいなや、母親は低い声で父親を起こし、それからベッドにいくように説得しようと努める。というのは、ここでやるのはほんとうの眠りではなく、六時に勤めにいかなければならない父親にはほんとうの眠りがぜひとも必要なのだ。しかし、小使になってから彼に取りついてしまった強情きで、いつでももつと長くテーブルのそばにいるのだと言ひ張るのだが、そのくせきまつて眠りこんでしまう。その上、大骨を折つてやつと父親に椅子とベッドとを交換させることができるのだ。すると母親と妹とがいくら短ないまじめの言葉でせつづいても、十五分ぐらいはゆつくりと頭を振り、眼をつぶつたまま

で、立ち上がろうとしない。母親は父親の袖そでを引つ張り、なだめるような言葉を彼の耳にささやき、妹は勉強を捨てて母を助けようとするのだが、それも父親にはききめがない。彼はいよいよ深く椅子に沈みこんでいく。女たちが彼のわきの下に手を入れるとやつと、眼を開け、母親と妹とをこもこもながめて、いつでもいふのだ。

「これが一生さ。これがおれの晩年の安らぎさ」

そして、二人の女に支えられて、まるで自分の身体が自分自身にとつて最大の重荷でもあるかのようにものものしい様子で立ち上がり、女たちにドアのところまでつれていってもらい、そこでもういいという合図をし、それからやつと今度は自分で歩いていく。一方、母親は針仕事の道具を、妹はペンを大急ぎで投げ出し、父親のあとを追っていき、さらに父親の世話をす

るのだ。

この働きすぎて疲れきつた家庭で、だれがどうしても必要やむをえないこと以上にグレゴールなんかに気を使うひまをもっているだろうか。家政はいよいよ切りつめられていった。女中ももうひまを出されていた。頭のまわりにぼさぼさの白髪をなびかせている骨ばつた大女が、朝と晩とにやつてきて、いちばんむずかしい仕事をやるようになった。ほかのことはすべて、母親がたくさんの針仕事のかたわら片づけていた。その上、以前には母親と妹とが遊びごとや祝いがあると有頂天になって身につけていたさまざまな家宝の装飾品も、晩にみんなが集つて売値の相談をしているのをグレゴールが聞いたところによると、売られてしまった。だが、最大の嘆きはいつでも、現在の事情にとってでは広すぎるこの住居を立ち退くことができないということこ

とであつた。なぜなら、グレゴールをどうやって引越させたものか、考えつくことができないからだつた。しかしグレゴールは、引越しを妨げているものはただ自分に対する顧慮だけではないのだ、ということをよく見抜いていた。というのは、彼のことなら、一つ二つ空気孔あなのついた適当な箱に入れてたやすく運ぶことができるはずだつた。この家族の移転を主として妨げているのは、むしろ完全な絶望感であり、親戚しんせきや知人の仲間のだれ一人として経験しなかつたほどに自分たちが不幸に打ちのめされているという思いであつた。世間が貧しい人びとから要求しているものを、家族の者たちは極限までやりつくした。父親はつまらぬ銀行員たちに朝食をもつていつてやるし、母親は見知らぬ人たちの下着のために身を犠牲にしているし、妹はお客たちの命令のままに売台のうしろであちこちかけ廻つてい

る。しかし、家族の力はもう限度まできているのだ。そして、母親と妹とが、父親をベッドへつれていったあとでもどつてきて、仕事の手を休めてたがいに身体をよせ合い、頬と頬とがふれんばかりに坐っているとき、また、今度は母親がグレゴールの部屋を指さして「グレーテ、ドアを閉めてちょうだい」というとき、そして二人の女が隣室でよせた頬の涙をませ合ったり、あるいはもう涙も出ないでテーブルをじつと見つめているあいだ、グレゴールのほうは、ふたたび暗闇のなかにおいて、その背中の傷は今はじめに受けたもののように痛み始めるのだった。

夜も昼もグレゴールはほとんど一睡もしないで過ごした。ときどき彼は、このつぎドアが開いたら家族のいつさいのことはまったく以前のようにならぬようにまた自分の手に引き受けてやろう、と考へた。彼の頭のなかには、久しぶりにまた社長や支配人、店員

たちや見習たち、ひどく頭の鈍い小使、別な店の二、三の友人
 たち、田舎いなかのあるホテルの客室づき女中、楽しいかりそめの思
 い出、彼がまじめに、しかしあまりにのんびり求婚したある帽
 子店のレジスター係の女の子、そんなものがつぎつぎに現われ
 た。——そうしたすべてが見知らぬ人びとやもう忘れてしまつ
 た人びとのあいだにまぎれて現われてくる。しかし、彼と彼の
 家族とを助けてはくれないで、みんな近づきがたい人びとであ
 り、彼らが姿を消すと、グレゴールはうれしく思うのだった。と
 ころが、つぎに家族のことなんか心配する気分になれなくなる。
 ただ彼らの世話のいたらなきに對する怒りだけが彼の心をみた
 してしまふ。何が食べたいのかも全然考えられないにもかかわ
 らず、少しも腹は空いていなくとも自分にふさわしいものをな
 んであるうと取るために、どうやったら台所へいくことができ

るか、などといろいろ計画を立ててみる。今はもう何をやった
 らグレゴールにかくべつ気に入るだろうかというようなことは
 考えもしないで、妹は朝と正午に店へ出かけていく前に、何か
 あり合せの食べものを大急ぎでグレゴールの部屋へ足で押しこ
 む。夕方には、その食べものがおそらくほんの少し味わわれた
 か、あるいは——そういう場合がいちばん多かつたが——まっ
 たく手をつけてないか、ということにはおかまいなしで、箒で
 一掃きして部屋の外へ出してしまふ。部屋の掃除は、今ではい
 つも妹が夕方にやるのだが、もうこれ以上早くはすませられな
 いというほど粗末にやるのだ。汚れたすじが四方の壁に沿つて
 引かれてあるし、そこかしこにはごみと汚れもののかたまり
 が横たわっている始末だ。はじめのうち、妹がやってくると、
 グレゴールはそうしたとくに汚れの目立つ片隅の場所に坐りこ

んで、そうした姿勢でいわば妹を非難してやろうとした。しかし、きつと何週間もそこにいてみたところで、妹があらためるということはないだろう。妹も彼とまったく同じくらいに汚れを見ているのだが、妹はそれをほっておこうと決心したのだ。その場合に妹は、およそ家族全員をとらえてしまった、これまでの彼女には見られなかつたような敏感さで、グレゴールの部屋の掃除は今でも自分の仕事であるという点を監視するのだ。た。あるとき、母親がグレゴールの部屋の大掃除を企てた。母親はただ二、三杯のバケツの水を使うことだけでその掃除をやり終えることができた。——とはいっても、部屋がびしょぬれになつてグレゴールは機嫌をそこねてしまい、ソファの上にとどつかと、腹立たしげに身動きもしないで構えていた——ところが、母親にその罰が訪れないではいなかつた。というのは、夕方、

妹がグレゴールの部屋の變化に気づくやいなや、彼女はひどく侮辱されたと感じて居間にかけてこみ、母親が両手を高く上げて嘆願するにもかかわらず、身をふるわせて泣き始めた。両親は——父親はむろん安楽椅子からびっくりして跳ね起きたのだった——はじめはそれにびっくりして、途方にくれてながめていたが、ついに二人も動き出した。右側では父親が、グレゴールの部屋の掃除は妹にまかせておかなかつたというので母親を責めるし、左側では妹のほうが、もう二度とグレゴールの部屋の掃除はしてやらないとわめく。母親は、興奮してわれを忘れている父親を寝室へひきずつていこうとする。妹は泣きじゃくつて身体をふるわせながら、小さな拳でテーブルをどんどんたたく。そしてグレゴールは、ドアを閉めて、自分にこんな光景とさわぎを見せないようにしようとしたのだれも思いつかないことに

腹を立てて、大きな音を出してしっしっというのだった。

しかし、たとい妹が勤めで疲れきってしまい、以前のよう
にグレゴールの世話をすることにあきあきしてしまつても、母親は
けつして妹のかわりをする必要はないし、グレゴールもほつた
らかしにされる心配はなかつたろう。というのは、今では例の
手伝い婆さんがいたのだ。長い一生をそのたくましい骨太の身
体の助けで切り抜けてきたように見えるこの後家婆さんは、グ
レゴールをそれほど嫌わなかつた。あるとき、別に好奇心に駆
られたというのでもなく、偶然、グレゴールの部屋のドアを開
け、だれも追い立てるわけでもないのにひどく驚いてしまつた
グレゴールがあちこちとはい廻り始めたのをながめると、両手
を腹の上に合わせてぽかんと立ちどまつているのだった。それ
以来、つねに朝晩ちよつとのあいだドアを少しばかり開けて、グ

レゴールのほうをのぞきこむことを忘れなかった。はじめのうちは、グレゴールを自分のほうに呼ぼうとするのだった。それには、「こつちへおいで、かぶと虫のじいさん!」とか、「ちよつとあのかぶと虫のじいさんをごらんよ」とか、おそらく婆さんが親しげなものと考えているらしい言葉をかけてくるのだ。こうした呼びかけに対してグレゴールは全然返事をせず、ドアがまったく開けられなかったかのようになり、自分の居場所から動かなかつた。この手伝い婆さんに気まぐれで役にも立たぬじやまなんかさせていないで、むしろ彼の部屋を毎日掃除するように命じたほうがよかつたらうに——ある早朝のこと——はげしい雨がガラス窓を打っていた。おそらくすでに春が近いしるしだろう——手伝い婆さんがまた例の呼びかけを始めたとき、グレゴールはすっかり腹を立てたので、たしかにのろのろとおぼ

つかなげにはあつたが、婆さんに向つて攻撃の身構えを見せた。ところが、手伝い婆さんは恐れもせず、ただドアのすぐ近くにあつた椅子を高く振り上げた。大きく口を開けて立ちはだかつている様子を見ると、手にした椅子がグレゴールの背中に振り下ろされたらはじめて口をふさぐつもりなのだ、ということを明らかに示していた。「それじゃあ、それつきりなのか」と、グレゴールがまた向きなおるのを見て言い、椅子をおとなしく部屋の片隅にもどした。

グレゴールは今ではもうほとんど何も食べなくなっていた。ただ、用意された食べもののそばを偶然通り過ぎるときにだけ、遊び半分にかかけ口のなかに入れるが、何時間でも口のなかに入れておいて、それからたいは吐き出すのだ。はじめは、彼に食事をさせなくしているのは、この部屋の状態を悲しむ気

持からだ、と考えていたが、部屋がいろいろ変わることにはずぐに慣れてしまった。ほかのところには置くことができない品物はこの部屋に置くという習慣になつてしまつていたが、そうした品物はたくさんあつた。住居の一室を三人の男の下宿人に貸したからだつた。このきまじめな人たちは——グレゴールがあるときドアのすきまから確認したところによると、三人とも顔じゅう髯を生やしていた——ひどく整頓が好きで、ただ自分たちの部屋ばかりではなく、ひとたびこの家に間借りするようになったからには、家全体について、ことに台所での整頓のことに気をくばつた。不必要なものや汚ないがらくたには我慢できなかつた。その上、彼らは調度品の大部分は自分たちのものをもつてきていた。そのために多くの品物は不要となつたが、それらは売るわけにもいかないし、さりとて捨ててしまいたく

もないのだった。そうした品物がみなグレゴールの部屋に移されてきた。そんなふうにして、灰捨て箱とくず箱とが台所からやってきた。およそ今のところ不要なものは、いつでもひどくせつかちな手伝い婆さんが簡単にグレゴールの部屋へ投げ入れてしまう。ありがたいことに、グレゴールにはたいいは運ばれてくる品物とそれをもっている手としか見えなかつた。手伝い婆さんはおそらく、いつか機会を見てそれらの品物をまた取りにくるか、あるいは全部を一まとめにして投げ捨てるかするつもりだつたのだらうが、実際にはそれらを最初投げ入れた場所にほうりばなしにしておいた。しかし、グレゴールはがらくたがじゃまになつて、まがりくねつて歩かなければならなかつたので、それを動かすことがあつた。はじめはそうしないとはい廻る場所がなくなるのでしかたなしにやつたのだが、のちに

はだんだんそれが面白くなつたのだつた。そうはいうものの、そんなふうにはい廻つたあとでは死ぬほど疲れてしまつて悲しくなり、またもや何時間も動かないでいるのだつた。

下宿人たちはときどき夕食も家で共同の居間で取るのだつた。そのため居間のドアは多くの晩に閉ざされたままだ。だが、グレゴールはドアを開けるといふことをまつたく気軽にあきらめた。ドアが開いている多くの晩でさえも、それを十分に利用しないでいて、家族には気づかれずに自分の部屋のいちばん暗い片隅に横たわつていた。ところが、あるとき、手伝い婆さんが居間へ通じるドアを少しばかり開け放しにした。下宿人たちが晩方入つてきて、明りをつけたときにも、ドアは開いたままだつた。三人はテーブルのかみ手に坐つた。以前は父親と母親とグレゴールとが坐つた場所だ。そして三人はナプキンを拵げ、ナ

イフとフオークとを手に取った。すぐにドアのところにもつた母親が現われ、彼女のすぐあとから妹が山盛りのじやがいもの皿をもつて現われた。食べものはもうもうと湯気を立てていた。下宿人たちは食べる前に調べようとするかのように、自分たちの目の前に置かれた皿の上へ身をかがめた。そして実際、まんなかに坐つていて、ほかの二人には権威をもっているように見える男が、皿の上で一片の肉を切った。それが十分柔かいかどうか、台所へ突つ返さなくてもよいかどうか、たしかめようとしているらしかった。しかし、その男が満足したので、緊張してながめていた母親と妹とは、ほつと息をついて微笑し始めた。

家族の者たち自身は台所で食事をした。それでも父親は台所へいく前にこの部屋へ入っていき、一回だけお辞儀をすると、

制帽を手にもち、テーブルのまわりをぐるりと廻る。下宿人たちはみんな立ち上がって、髯のなかで何かをつぶやく。つぎに彼らだけになると、ほとんど完全な沈黙のうちに食事をする。食事のあらゆる物音からたえずものをかむ歯の音が聞こえてくるのが、グレゴールには奇妙に思われた。まるで食べるためには歯が必要であり、いくらりつぱでも歯のない顎あごではどうすることもできないということをグレゴールに示そうとするかのようにだつた。グレゴールは心配そうに自分に言い聞かせた。

「おれは食欲があるが、あんなものはいやだ。あの人たちはものを食べて栄養を取っているのに、おれは死ぬのだ！」

まさにその夜のことだつたが——あれからずっと、グレゴールはヴァイオリンの音を聞いたおぼえがなかった——ヴァイオリンの音が台所から聞こえてきた。下宿人たちはもう夕食を終

え、まんなかの男が新聞を引つ張り出し、ほかの二人に一枚ずつ渡した。そして、三人とも椅子にもたれて読み、煙草をふかしていた。ヴァイオリンが鳴り始めると、三人はそれに気づき、立ち上がって、爪立ちで歩いて玄関の間へいき、そこで身体をよせたまま立ちつづけていた。台所にいても彼らの物音が聞こえたらしい。父親がこう叫んだ。

「みなさんにはヴァイオリンの音がお気にさわるんではありませんか。なんならすぐやめさせますが」

「どうしまして」と、まんなかの男がいった。

「お嬢さんはわれわれのところにくられて、この部屋で弾かれたらどうです？ こちらのほうがずっといいし、気持もいいですよ」

「それでは、そう願いますか」と、父親はまるで自分がヴァイ

オリンを弾いているかのようには答えた。三人は部屋にもどつて待っていた。まもなく父親は譜面台をもち、母親は楽譜を、妹はヴァイオリンをもつてやつてきた。妹は落ちついて演奏の準備をすつかりすませた。両親はこれまで一度も間貸しをしたことがなく、そのために下宿人たちに対する礼儀の度を超していたが、自分たちの椅子に坐ろうとはけつしてしなかつた。父親はドアにもたれ、きちんとボタンをかけた制服の上衣のボタン二つのあいだに右手をさし入れていた。母親のほうは下宿人の一人に椅子をすすめられ、その人が偶然すすめた椅子が部屋のわきのほうの片隅にあつたので、そこに坐りつづけていた。

妹は弾き始めた。父親と母親とはそれぞれ自分のいる位置から注意深く妹の両手の動きを目で追っていた。グレゴールは演奏にひきつけられて少しばかり前へのり出し、もう頭を居間へ

突つこんでいた。最初は自分が他人のことをもう顧慮しなくなつてゐることが、彼にはほとんどふしぎに思われなかつた。以前には、この他人への顧慮ということが彼の誇りだつた。しかも、彼は今こそいつそう自分の身を隠していい理由をもつていた。というのは、部屋のなかのいたるところに横たわつてゐるごみが、ちよつとでも身体を動かすと舞い上がり、そのごみをすっかり身体にかぶつていた。糸くずとか髪の毛とか食べものの残りかすを背中やわき腹にくつつけてひきぎずつて歩いているのだ。あらゆることに対する彼の無関心はあまりに大きいので、以前のように一日に何度も仰向けになつて、絨毯に身体をこすりつけることもしなくなつていた。こんな状態であるにもかかわらず、少しも気おくれを感じないで、非の打ちどころのないほど掃除のゆきとどいてゐる居間の床の上へ少しばかり乗り出して

いった。

とはいえ、ほかの人たちのほうも彼に気づく者はいなかった。家族の者はすっかりヴァイオリンの演奏に気を取られていた。それに反して、下宿人たちははじめは両手をポケットに突っこんで、妹の譜面台のすぐ近くに席を占めていた。あまりに近いので三人とも楽譜をのぞきこめるくらいだった。そんなことをやったら、妹のじやまになったことだろう。ところが、やがて低い声で話し合いながら、頭を垂れたまま窓のほうへ退いていった。父親が心配そうに見守るうちに、彼らはその窓ぎわにとどまっていた。すばらしい、あるいは楽しいヴァイオリン演奏を聞くつもりなのが失望させられ、演奏全体にあきあきして、ただ儀礼から我慢しておとなしくしているのだということは、実際見ただけではつきりわかることだった。ことに、三人が鼻と

口とから葉巻の煙を高く吹き出しているやりかたは、ひどくいらいらしているのだということを推量させた。しかし、妹はとも美しく弾いていた。彼女の顔は少しわきに傾けられており、視線は調べるように、また悲しげに楽譜の行を追っている。グレゴールはさらに少しばかり前へはい出し、頭を床にぴったりつけて、できるなら彼女の視線とぶつかってやろうとした。音楽にこんなな心を奪われていても、彼は動物なのだろうか。彼にはあこがれていた未知の心の糧かてへの道が示されているように思えた。妹のところまで進み出て、彼女のスカートを引っ張って、それによつてヴァイオリンをもつて自分の部屋へきてもらいたいとほのめかそう、と決心した。というのは、ここにこたにいるだけ一人として、彼がしたいと思つているほど彼女の音楽にこた応える者はいないのだ。彼はもう妹を自分の部屋から出したくなかつ

た。少なくとも自分が生きているあいだは、出したくなかった。彼の恐ろしい姿ははじめて彼の役に立つだろうと思われた。自分の部屋のどのドアも同時に見張っていて、侵入してくる者たちにほえついてやるつもりだ。だが、妹はしいられてではなく、自由意志で自分のところにとどまらなければならぬ。ソファの上で彼のわきに坐り、耳を彼のほうに傾けてくれるのだ。そこで彼は妹に、自分は妹を音楽学校に入れることにはつきり心をきめていたのであり、もしそのあいだにこんな事故が起ころなかつたならば、去年のクリスマスに——クリスマスはやっぱりもう過ぎてしまったのだろうか——どんな反対も意に介することなくみんなにいつていたことだろう、と打ち明けてやる。こう説明してやれば、妹は感動の涙でわつと泣き出すことだろう。そこでグレゴールは彼女の肩のところまでのび上がった、

首に接吻してやるのだ。店へいくようになってからは、妹はリボンもカラーもつけなくて首を丸出しにしているのだった。

「ザムザさん！」と、まんなかの男が父親に向って叫び、それ以上は何もいわずに、人差指でゆっくりと前進してくるグレゴールをさし示した。ヴァイオリンの音がやみ、まんなかの下宿人ははじめは頭を振って二人の友人にやりと笑って見せたが、つぎにふたたびグレゴールを見やった。父親は、グレゴールを追い払うかわりに、まず下宿人たちをなだめることのほうがいっそう必要だと考えているようであった。とはいっても、三人は全然興奮なんかしていないし、グレゴールのほうがヴァイオリンの演奏よりも彼らを面白がらせているように見えた。父親は三人のほうに急いでいき、両腕を拡げて彼らの部屋へ押しもどそうとし、同時に、自分の身体でグレゴールの姿が見えなくな

るようにしようとした。今度は三人がほんとうに少しばかり気を悪くした。父親の態度に気を悪くしたのか、グレゴールのよ
うな隣室の住人がいるものとは知らなかったのに、今やつとそ
れがわかつてきたことに気を悪くしたのか、それはもうなんと
もいえなかつた。三人は父親に説明を求め、三人のほうで腕を
振り上げ、落ちつかないげに髯を引っ張り、ほんのゆつくりした
歩みで自分たちの部屋のほうへ退いていった。そうしているあ
いだに、突然演奏をやめて放心状態でいた妹はやつと正気を取
りもどし、しばらくのあいだだらりと垂れた両手にヴァイオリ
ンと弓とをもつて、まだ演奏しているかのように楽譜をながめ
つづけていたが、突然身を起こすと、はげしい肺の活動をとも
なう呼吸困難に陥つてまだ自分の椅子に坐っていた母親の膝の
上に楽器を置き、隣室へとかけこんでいった。三人の下宿人た

ちは、父親に押しまくられてすでにさつきよりは早い足取りでその部屋へ近づいていた。妹が慣れた手つきでベッドのふとんや枕を高く飛ばしながら寝具の用意を整えるのが見えた。三人が部屋へたどりつくよりも前に、妹はベッドの用意をすませてしまい、ひらりと部屋から脱け出ていた。父親はまたもや気ままな性分にすっかりとらえられてしまったらしく、ともかく下宿人に対して払わなければならぬ敬意を忘れてしまった。彼は三人をただ押しまくっていったが、最後に部屋のドアのところでもんなかの人が足を踏み鳴らしたので、父親はやつととまった。

「私はここにはつきりというが」と、その人は片手を挙げ、眼で母親と妹とを探した。「この住居および家族のうちに支配しているいとわしい事情を考えて」——ここでとつきの決心をして

床につばを吐いた——「私の部屋をただちに出ていくことを通告します。むろん、これまでの間借料も全然支払いません。それに反して、きわめて容易に理由づけることができるはずのなんならかの損害賠償要求をもつて——いいですか——あなたを告訴すべきものかどうか、考えてみるつもりです」彼は沈黙して、まるで何かを待ちかまえているかのように自分の前を見つめていた。

「われわれもただちに出ていきます」と、はたして彼の二人の友人もすぐさま口を出した。まんなかの男はドアの取手をつかみ、ばたと音を立ててドアを閉めた。

父親は手探りで自分の椅子までよろめいていき、どかりと腰を下ろした。まるでいつものように晩の居眠りをするために手足をのばしたように見えた。だが、ぐらぐらする頭が強くうな

ずいていることで、彼が全然眠っていないことがわかった。グレゴールはこうしたことが行われるあいだじゅう、下宿人たちが彼を見つけた場所にじつとどまつていた。自分の計画の失敗に対する失望と、またおそらくはあまりに空腹をつづけたことから起つた衰弱とのために、身体を動かすことができなかつた。彼はつぎの瞬間にはどつといろいろなものが墜落してくるだろう、と早くもある確信をもつて恐れ、それを待ちかまえていた。ヴァイオリンが母親のふるえる指のあいだをすべつて膝から床へと落ち、がたと響きを立てたことも、彼をびつくりさせて動き出させることは全然なかつた。

「お父さん、お母さん」と、妹はいつて、話に入る前に手でテーブルを打った。「もうこれまでだわ。あなたがたはおそらくわからないのですが、わたしにはわかります。こんな怪物の

前で兄さんの名前なんかいいたくはないわ。だから、わたしたちはこいつから離れようとしなければならぬ、とだけいうわ。こいつの世話をし、我慢するために、人間としてできるだけのことをやろうとしてきたじゃないの。だれだって少しでもわたしたちを非難することはできないと思うわ」

「これのいうのはまったくもつともだ」と、父親はつぶやいた。まだ十分に息をつけないでいる母親は、狂ったような目つきをして、口に手を当てて低い音を立てながら咳をし始めた。

妹は母親のところへ急いでいき、彼女の額を支えてやった。父親は妹の言葉を聞いて、何か考えがきまったように見えた。身体をまっすぐにして坐ると、下宿人たちの夕食からまだテーブルの上に置き放しになっている皿のあいだで小使の制帽をもてあそんでいたが、ときどきじつとしていたグレゴールの上に

視線を投じている。

「わたしたちはこいつから離れなければならぬのよ」と、妹はもつぱら父親に向つていった。母親のほうは咳きこんで何も聞こえないのだ。

「こいつはお父さんとお母さんとを殺してしまふわ。そうなることがわたしにはわかつています。わたしたちみんなのようにならぬに苦勞して働かなければならぬときには、その上に、家でもこんな永久につづく悩みなんか辛抱できないわ。わたしももう辛抱できないわ」そして、彼女ははげしく泣き始めたので、涙が母親の顔の上にかかった。妹は機械的に手を動かしてその涙をぬぐつてやった。

「お前」と、父親は同情をこめ、まったくそのとおりだというような調子でいった。「でも、どうしたらいいんだらうな？」

妹は、途方にくれていることを示すために肩をすぼめた。泣いているあいだに、さっきの断固とした態度とは反対に、どうしていいのかわからなくなっていたのだった。

「あいつがわれわれのことをわかつてくれたら」と、父親は半ばたずねるようにいった。妹は泣きながらはげしく手を振った。そんなことは考えられない、ということを示すものだった。

「あいつがわれわれのことをわかつてくれたら」と、父親はくり返して、眼を閉じ、そんなことはありえないという妹の確信を自分でも受け容れていた。「そうしたらおそろくあいつと話をつけることができるんだろうが。だが、こんなふうじゃあねえ——」

「あいつはいなくならなければならぬのよ」と、妹は叫んだ。「それがただ一つの手段よ。あいつがグレゴールだなんていう

考えから離れようとしさえすればいいんだわ。そんなことをこんな長いあいだ信じていたことが、わたしたちのほんとうの不幸だったんだわ。でも、あいつがグレゴールだなんていうことがどうしてありうるでしょう。もしあいつがグレゴールだったら、人間たちがこんな動物といっしょに暮らすことは不可能だつて、とつくに見抜いていたでしょうし、自分から進んで出ていってしまったことでしょう。そうなったら、わたしたちにはお兄さんがいなくなつたでしょうけれど、わたしたちは生き延びていくことができ、お兄さんの思い出を大切にしまつておくことができたでしょう。ところが、この動物はわたしたちを追いかけて、下宿人たちを追い出すのだわ。きつと住居全体を占領し、わたしたちに通りで夜を明かさせるつもりなのよ。ちよつとみてごらんさい、お父さん」と、妹は突然叫んだ。「またや

り出したわよ！」

そして、グレゴールにもまったくわからないような恐怖に襲われて、妹は母親さえも離れ、まるで、グレゴールのそばにいるよりは母親を犠牲にしたほうがましだといわんばかりに、どう見ても母親を椅子から突きとばしてしまい、父親のうしろへ急いで逃げていった。父親もただ娘の態度を見ただけで興奮してしまい、自分でも立ち上がると、妹をかばおうとするかのように両腕を彼女の前に半ば挙げた。

しかし、グレゴールは、だれかを、まして妹を不安に陥れようなどとは考えてもみなかった。彼はただ、自分の部屋へもどつていこうとして、身体の向きを変え始めていただけだった。そうはいっても、その動作がひどく目立った。今の苦しい状態のために、困難な回転をやる場合に頭の助けを借りなければなら

なかつたからだ。そこで頭を何度ももたげては、床に打ちつけた。彼はじつととまって、あたりを見廻した。彼の善意はみとめられたようだった。人びとはただ一瞬ぎよつとしただけだった。そこでみんなは、沈黙したまま、悲しげに彼をじつと見つめた。母親は両脚をぴったりつけたまま前へのぼして、椅子に坐っていた。疲労のあまり、眼がほとんど自然に閉じそうだった。父親と妹とは並んで坐り、妹は片手を父親の首に廻していた。

「これでもう向きを変えてもいいだろう」と、グレゴールは考えて、彼の仕事にまた取りかかった。骨が折れるために息がはあはあいうのを抑えることはできなかつた。そこで、ときどき休まないではいられなかつた。ところで、彼を追い立てる者はいなかつた。万事は彼自身のやるがままにまかせられた。回転

をやり終えると、すぐにまつすぐにはいもどり始めた。自分と自分の部屋とを距てている距離が大きいことにびっくりした。そして、身体が衰弱しているのにどうしてついさつきはこの同じ道を、こんなに遠いとはほとんど気づかないではつていったのか、理解できなかつた。しよつちゆうただ早くはつていくことだけを考えて、家族の者が言葉や叫び声をかけて彼をじやますることははない、というのには気づかなかつた。もうドアのところにもで達したときになつてやつと、頭を振り返らしてみた。完全に振り返つたのではない。というのは、首がこわばつていゝるのを感じたのだつた。ともあれ、自分の背後では何一つ変化が起つていないことを見て取つた。ただ妹だけが立ち上がった。いた。彼の最後の視線が母親の上をかすめた。母親はもう完全に眠りこけていた。

自分の部屋へ入るやいなや、ドアが大急ぎで閉められ、しつかりととめ金がかけられ、閉鎖された。背後に突然起つた大きな物音にグレゴールはひどくびつくりしたので、小さな脚ががくりとした。あんなに急いだのは妹だった。もう立ち上がって待っていて、つぎにさつと飛んできたのだった。グレゴールには妹がやってくる足音は全然聞こえなかった。ドアの鍵を廻しながら、「とうとうこれで！」と、妹は叫んだ。

「さて、これで？」と、グレゴールは自分にたずね、暗闇くらやみのなかであたりを見廻した。まもなく、自分がもうまったく動くことができなくなっていることを発見した。それもふしぎには思わなかった。むしろ、自分がこれまで実際にこのかほそい脚で身体をひきずってこられたことが不自然に思われた。ともかく割合に身体の工合はいいように感じられた。なるほど身体全体

に痛みがあつたが、それもだんだん弱くなつていき、最後にはすっかり消えるだろう、と思われた。柔かいほこりにすっかり被われている背中の腐つたりリングと炎症を起こしている部分とは、ほとんど感じられなかつた。感動と愛情とをこめて家族のことを考えた。自分が消えてしまわなければならぬのだという彼の考えは、おそろく妹の意見よりもっと決定的なものだつた。こんなふう空虚なみちたりたもの思いの状態をつづけていたが、ついに塔の時計が朝の三時を打つた。窓の外ではあたりが明るくなり始めたのを彼はまだ感じた。それから、頭が意に反してすっかりがくりと沈んだ。彼の鼻孔びこうからは最後の息がもれて出た。

朝早く手伝い婆さんがやつてきたとき——いくらそんなことをやらないでくれと頼んでも、力いっぱい大急ぎでどのドア

もばたんばたん閉めるので、この女がやってくると、家じゅうの者はもう静かに眠っていることはできなかつた——いつものようにちよつとグレゴールの部屋をのぞいたが、はじめは別に異常をみとめなかつた。グレゴールはわざとそんなふうにしん動きもしないで横たわつて、ふてくされて見せているのだ、と手伝い婆さんは思った。彼女はグレゴールがありとあらゆる分別をもっているものと思つていた。たまたま長い箒を手にもつていたので、ドアのところからそれでグレゴールをくすぐろうとした。ところがなんのききめも現われないので、怒つてしまひ、グレゴールの身体を少しつついた。彼がなんの抵抗も示さずに寝ているところからずると押しやられていったときになつてはじめて、女はおかしいな、と思つた。まもなく真相を知ると眼を丸くし、思わず口笛のような音を出したが、たいし

てそこにとどまっつてはいず、寢室のドアをきつと開いて、大きな声で暗闇に向つて叫んだ。

「ちよつとごらんなきいよ。のびていますよ。ねていますよ。すつかりのびてしまつていますよ！」

ザムザ夫妻はダブル・ベッドの上になつすぐに身体を起こし、手伝い婆さんのいうことがわかるより前に、まずこの女にびつくりさせられた気持ちをしずめなければならなかつた。だが、事情のみこめると夫婦はそれぞれ自分の寝ていた側から急いでベッドを下りた。ザムザ氏は毛布を肩にかけ、ザムザ夫人はただ寝巻のままの姿で出てきた。二人はそんな恰好でグレゴールの部屋へ入つていった。そのあいだに、下宿人がやつてきて以来グレーテが寝るようになった居間のドアも開けられた。グレーテは全然眠らなかつたように、完全な身支度をしていた。彼女

の蒼い顔も、眠っていないことを証明しているように思われた。「死んだの？」と、ザムザ夫人はいつて、たずねるように手伝い婆さんを見上げた。とはいっても自分で調べる事ができるし、また調べなくともわかることだった。

「そうだと思いますね」と、手伝い婆さんはいつて、それを証明するためにグレゴールの死骸を箒でかなりの距離押してやった。ザムザ夫人は、箒を押しとめようとするような動作をちよつと見せたが、実際にはそうはしなかった。

「これで」と、ザムザ氏がいった。「神様に感謝できる」彼は十字をきつた。三人の女たちも彼のやるとおり見ならつた。死骸から眼を放さないでいたグレーテがいった。

「ごらんなさいな。なんてやせていたんでしよう。もう長いこと全然食べなかつたんですものね。食べものは入れてやったと

きのままで出てきたんですもの」

事実、グレゴールの身体はまったくぺしゃんこでひからびていて、もう小さな脚では身体がもち上げられなくなり、そのほかの点でも人の注意をそらすようなものがまったくなくなってしまうた今になってやっと、そのことがわかるのだった。

「グレーテ、ちよつとわたしたちの部屋へおいで」と、ザムザ夫人は悲しげな微笑を浮かべていった。グレーテは死骸のほうを振り返らないではいられなかったが、両親につづいて寢室へ入っていった。手伝い婆さんはドアを閉め、窓をすっかり開けた。朝が早いにもかかわらず、すがすがしい空気にはすでにいくらかなま暖かさがまじっていた。もう三月の末だった。

三人の下宿人が自分たちの部屋から出てきて、びっくりしたように自分たちの朝食を探してあたりをきよろきよろ見廻した。

朝食の用意は忘れられていた。

「朝食はどこにあるんだ？」と、まんなかの人がぶつぶつ言いながら手伝い婆さんにたずねた。ところが婆さんは口に指をあてて、黙ったまま急いで、グレゴールの部屋へいつてみるように、という合図をしてみせた。三人はいわれたとおりに部屋へいき、いくらかくたびれた上衣のポケットに両手をつこんだまま、今ではもう明るくなった部屋のなかでグレゴールの死骸のまわりに立った。

そのとき寢室のドアが開いて、制服姿のザムザ氏が現われ、一方の腕で妻を抱き、もう一方の腕で娘を抱いていた。みんな少し泣いたあとだった。グレーテはときどき顔を父親の腕に押しつけた。

「すぐ私の家を出ていつていただきましょう！」と、ザムザ氏

はいつて、二人の女を身体から離さないでドアを指さした。

「それはどういう意味なんです？」と、まんなかの人は少し驚きながらいつて、やさしそうな微笑をもらした。ほかの二人は両手を背中に廻して、たえずこすつてゐる。まるで自分たちに有利な結果に終わるにきまつてゐる大きな争いをうれしがつて待ちかまえてゐるようだった。

「今申しているとおりの意味です」と、ザムザ氏は答え、二人の女と一直線に並んで下宿人たちのほうへ近づいていつた。例の人ははじめのうちにはじつと立つたまま、事柄を頭のなかでまとめ新しく整理しようとするかのように、床を見つめていた。

「それでは出ていきましよう」と、いつたが、ザムザ氏を見上げた。まるで突然襲われたへりくだつた気持でこの決心にさえ新しい許可を求めているかのようにだつた。ザムザ氏は大きな眼

をしてただ何度かうなずいて見せるだけだった。それからその人はほんとうにすぐ大股で玄関の間へと歩いていった。二人の友人はしばらく両手の動きをすっかりとめたまま聞き耳を立てていたが、例の人のあとを追って飛んでいった。まるでザムザ氏が自分たちより前に玄関の間に入って、自分たちの指導者である例の人との連絡をじやまするかもしれないと不安に思っているようであった。玄関の間で三人はそろって衣裳かけから帽子を取り、ステッキ立てからステッキを抜き出し、無言のままお辞儀をして、住居を出ていった。すぐわかったがまったくいわれのない不信の念を抱きながら、ザムザ氏は二人の女をつれて玄関口のたたきまで出ていった。そして、三人がゆつくりとではあるが、しかししつかりとした足取りで長い階段を降りていき、一階ごとに階段部の一定の曲り角へくると姿が消え、そ

してまたすぐに現われてくるのを、手すりにもたれてながめていた。下へ降りていくにつれて、それだけザムザ家の関心は薄らいでいった。この三人に向つて、そしてつぎには三人の頭上高く一人の肉屋の小僧が頭の上に荷をのせて誇らしげな態度でのぼつてきたとき、ザムザ氏は女たちをつれて手すりから離れ、まるで気が軽くなつたような様子で自分たちの住居へもどつていった。

彼らは今日という日は休息と散歩とに使おうと決心した。こういうふうな仕事を中断するには十分な理由があつたばかりでなく、またそうすることがどうしても必要だつた。そこでテーブルに坐つて三通の欠勤届を書いた。ザムザ氏は銀行の重役宛に、ザムザ夫人は内職の注文をしてくれる人宛に、そしてグレーテは店主宛に書いた。書いてあるあいだに手伝い婆さんが入つ

てきた。もう帰ると言いに来たのだった。というのは、朝の仕事は終つていた。届を書いていた三人ははじめはただうなずいてみせるだけで眼を上げなかつたが、手伝い婆さんがまだその場を離れようとしないので、やつと怒つたように見上げた。

「何か用かね？」と、ザムザ氏がたずねた。手伝い婆さんは微笑しながらドアのところ立つていたが、家族の者たちに大きな幸福について知らせてやることがあるのだが、徹底的にたずねてくれなければ知らせてはやらない、といわんばかりであつた。帽子の上にほとんどまっすぐに立つてゐる小さなだちよう駝鳥の羽根飾りは、彼女が勤めるようになってからザムザ氏が腹を立てていたものだが、それが緩やかに四方へゆれている。

「で、いったいどんな用なの？」と、ザムザ夫人がたずねた。手伝い婆さんはそれでもこの夫人をいちばん尊敬していた。

「はい」と、手伝い婆さんは答えたが、親しげな笑いのためにすぐには話せないでいる。「隣りのものを取り片づけることについては、心配する必要はありません。もう片づいています」

ザムザ夫人とグレーテとはまた書きつづけようとするかのようには手紙にかがみこんだ。ザムザ氏は、手伝い婆さんがいつさいをくわしく説明し始めようとしているのに気づいて、手をのばして断固として拒絶するということを示した。女は話すことが許されなかつたので、自分がひどく急がなければならぬことを思い出し、侮辱されたように感じたらしく「さよなら、みなさん」と叫ぶと、乱暴に向きなおつて、ひどい音を立ててドアを閉め、住居を出ていった。

「夕方、あの女にひまをやろう」と、ザムザ氏はいったが、妻からも娘からも返事をもらわなかつた。というのは、手伝い婆さ

んがこの二人のやつと得たばかりの落ちつきをまたかき乱してしまつたらしかつた。二人は立ち上がつて、窓のところへいき、抱き合つて立つていた。ザムザ氏は彼の椅子に腰かけたまま二人のほうを振り返つて、しばらくじつと二人を見ていた。それから叫んだ。

「さあ、こつちへこいよ。もう古いことは捨て去るのだ。そして、少しはおれのことにも心配してくれよ」

すぐ二人の女は彼のいうことを聞き、彼のところへもどつて、彼を愛撫あいぶし、急いで欠勤届を書いた。

それから三人はそろつて住居を出た。もう何カ月もなかつたことだ。それから電車で郊外へ出た。彼ら三人しか客が乗つていない電車には、暖かい陽がふり注いでいた。三人は座席にゆつくりともたれながら、未来の見込みをあれこれと相談し合つた。

そして、これから先のこともよく考えてみるとけつして悪くはないということがわかった。というのは、三人の仕事は、ほんとうはそれらについておたがいにたずね合つたことは全然なかつたのだが、まったく恵まれたものであり、ことにこれからあと大いに有望なものだった。状態をさしあたりもつとも大幅に改善することは、むろん住居を変えることによつてできるにちがひなかつた。彼らは、グレゴールが探し出した現在の住居よりももつと狭くて家賃の安い、しかしもつといい場所にある、そしてもつと実用的な住居をもつと思つた。こんな話をしていくあいだに、ザムザ夫妻はだんだんと元気になつていく娘をながめながら、頬の色も蒼あおざめたほどのあらゆる心労にもかかわらず、彼女が最近ではめつきりと美しくふくよかな娘になつていた、ということにほとんど同時に気づいたのだった。いよいよ

よ無口になりながら、そしてほとんど無意識のうちに視線でたがいに相手の気持をわかり合いながら、りっぱなおおむこさんを彼女のために探してやることを考えていた。目的地の停留場で娘がまつききに立ち上がって、その若々しい身体をぐつとのばしたとき、老夫妻にはそれが自分たちの新しい夢と善意とを裏書きするもののように思われた。

変身 DIE VERWANDLUNG

底本：「世界文学大系 58 カフカ」筑摩書房
1960（昭和 35）年 4 月 10 日発行

入力：kompass

校正：青空文庫

2010 年 11 月 28 日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫
(<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作
にあたったのは、ボランティアの皆さんです。